

## 目次

1. 巻頭随筆：統計学の発展に向けて …赤平昌文… 1	8. 会員からの投稿記事 第1回のIMS Asia Pacific Rim Meeting 報告 ……………竹村彰通…18
2. 第14回日本統計学会賞について 2.1 日本統計学会賞……………美添泰人… 3 2.2 受賞のことは……………吉田朋広… 3	9. 2009年度統計関連学会連合大会報告 9.1 プログラム委員会報告……………水田正弘…18 9.2 運営委員会報告……………橋本紀子…22 9.3 コンペティション 受賞のことは ……………林 賢一…23 ……………大東健太郎…24 ……………熊坂夏彦…24 ……………首藤信通…25 ……………藤井陽介…25
3. 第5回日本統計学会統計活動賞について 3.1 日本統計学会統計活動賞……………美添泰人… 6 3.2 受賞のことは……………間瀬 茂… 6	10. 2010年度統計関連学会連合大会について ……26
4. 第5回日本統計学会統計教育賞について 4.1 日本統計学会統計教育賞……………美添泰人… 7 4.2 受賞のことは……………牧下英世… 9 ……………菅野栄光…10	11. 第77回日本統計学会総会報告 ……26
5. 第3回日本統計学会研究業績賞について 5.1 日本統計学会研究業績賞……………美添泰人…11 5.2 受賞のことは……………西山慶彦…12 ……………Peter M. Robinson…13 ……………駒木文保…13	12. 理事会議事録 ……31
6. 第2回日本統計学会出版賞について 6.1 日本統計学会出版賞……………美添泰人…14 6.2 受賞のことは……………小西貞則・北川源四郎…15	13. 研究部会新設公募 ……32
7. 第23回日本統計学会小川研究奨励賞について 7.1 日本統計学会小川研究奨励賞 ……………Richard D. Gill…16 7.2 受賞のことは……………西山陽一…17	14. 新刊紹介 ……32
	15. 学会事務局から ……32
	16. 投稿のお願い ……33

## 1. 巻頭随筆：統計学の発展に向けて

赤平 昌文（筑波大学）

最近の社会状況から見ても、統計学に対する期待は年々高まりつつあるように思われる。たとえば、大型書店では統計学関係書のコーナーが設置されていて、入門書から啓蒙書、専門書が所狭し

と並んでいて、昔とは格段の感がある。しかし、統計学という学問は極めて学際的で他の様々な分野と密接に結びつき、それなりに有効な手法を提供してくれるとして理解はされているが、その立

ち位置はやや曖昧でそれぞれの分野の中に埋没してしまう危険性を常にはらんでいる。一方、情報学という分野があるが、これもあまりにも漠然としているために、広い意味では統計学を包含しているとも考えられる。このような状況の中で、統計学者がその主体性を如何に発揮すれば良いのであろうか。

最近のコンピューターの発達と相まって、統計学もその恩恵を被っていて、様々な分野の問題に「シミュレーション」という手段により、相当、対応可能なことも確かであり、多くの統計学者がそれに携わり、有用な成果を挙げていることも事実である。しかし、統計学が真のサイエンスになるためには、どうしても理論的な裏付けが欠かせないのではないだろうか。もちろん、すべての問題が理論的に解決できるとは思わないが、そのための努力は不可欠であり、それは統計学者に求められていると考える。

実は、8年程前に、ある大学の薬学部の教授から新薬承認に関してブリッジングの問題を提起され、その際に、自分達は既成の統計的手法等を用いたシミュレーションを実行することはそれ程助けを借りなくてもできるが、どうしてもアドホックにしか対応できないということで、そのための理論的な考察を依頼されたことがある。一般的にそのような場合に数理統計学の新しい理論が構築されれば、それに基づいて対応できるし、もし現実に関わなければ改良していけばよい。これは1つの見解にしか過ぎないかもしれないが、統計学が諸分野の中に埋没しないためには重要なことではないだろうか。

さらに、大局的な観点から見れば、諸分野から提起された統計的問題を協働で解決するだけではなく、統計学をサイエンスとして位置付けるためには、必ずしも役立つことだけに焦点を当てるのではなく、その時点では、役立つかどうか分からないものでも理論的に研究することに寛容になることが必要で、それは学問の進歩にもつながると考えられる。実際、数学の研究でその時点では全く応用など考えもしなかったことが、後に応用

面で重要な役割を果たした例は少なくない。従って、研究している時点で、「それは何の役に立つのですか?」という問いに答えられないからといって無意味であると結論付けることには少し躊躇した方が良いのではないだろうか。日本の統計学の研究も特に1970年代から著しく発展し国際的にも認知されるようになったが、欧米に比べまだまだ日本の統計学の研究者は全体的に層が薄いので、理論、応用ともに密接に協力しあって切磋琢磨しながら研究を推進していくことが望まれる。

最近、日本の数学は、報告書「忘れられた科学—数学」(文部科学省科学技術政策研究所, 2006)において、その地盤沈下が指摘されたが、その影響もあってその後立ち上げられた科学技術振興機構(JST)の戦略的創造研究推進事業の研究領域「数学と諸分野の協働によるブレークスルーの探索」の下での数学者、数理統計学者らの活躍は目覚ましいものがあり、日本の数学界の意識も次第に変わりつつあるような印象を受け、私も領域アドバイザーの1人として、統計学の果す役割も大きいと感じている。

次に、現実の問題としては、若手の人材育成の問題がある。現在の大学の置かれている状況、たとえば、少子化に伴う大学の経営難、国立大学法人の運営費交付金の削減による影響等の困難が押し寄せてきて、教員数の削減、ポストクの就職難に連動する大学院博士後期課程の学生の減少など頭の痛い問題が山積している。日本の大学では統計学の専門家の養成は、ほとんど理学系、工学系、経済学系、医薬学系等、様々な分野の一部として行われていることが多いので、そこで統計学の教育を行うために多くの努力を払われているのが現状であり、さらに、統計学のテリトリーを守るための相応の努力も必要とされる。実際、統計学を、所属している分野の人達に認識してもらうためには、統計学について説明するだけでは不十分で、むしろ所属する他分野の学問を理解し、それと対等に議論することによって、相手から理解され易くなるように思われる。また、そうすることは様々な知識を蓄積できると共に異分野の人達と

共存していく術を学ぶことにもなり、これは教員のみならず学生にとっても同じで有益であろう。統計学を専門とする学生達には、是非、異分野への挑戦をして欲しいが、その分野の知識を習得する必要がある、時には彼らにとって苦痛を伴うものになるかもしれない。しかし、そうすることによって、統計学の有用性が認識され、さらに未来への明るい展望が開けてくるのではないだろうか。その際、シミュレーションの技だけでなく理論的側面からの思考も期待されるであろう。

最近、数学者の知人からもたらされた2009年8

月6日付け、International Herald Tribune紙に掲載された記事によれば、米国ではウェブ関係等のデータ解析のためにstatisticianの需要が高まっている、Google等で活躍する人達が紹介されている。将来的には、様々な職種での活躍が考えられるが、何か統計学の核となるものを持った上で、それに柔軟に対応できるような若手の人材の育成が望まれるのではないだろうか。ともあれ、いろいろな分野での若い統計家達の活躍を心から期待したい。

## 2. 第14回日本統計学会賞について

### 2.1 日本統計学会賞

美添 泰人（日本統計学会会長）

第14回日本統計学会賞の受賞者は

吉田 朋広氏（東京大学）

に決定いたしました。受賞者には、賞状と副賞の時計が贈呈されました。受賞理由と略歴は以下の通りです。

受賞者氏名：吉田 朋広 氏

略 歴：1985年 京都大学理学部数学科卒業、1987年 大阪大学大学院基礎工学研究科修士（1991年同工学博士）、1989年 大阪大学基礎工学部助手、1990年 統計数理研究所助手、1993年 同助教授、1996年 東京大学大学院数理科学研究科助教授、2003年 同教授、現在に至る。

受賞理由：数理統計学、確率過程の統計的推測理論、数理ファイナンス・確率数値解析などへの応用に関して、多くの国際的成果を挙げた。特に連続時間確率過程の汎関数に対する分布の漸近展開アプローチを開発、発展させ、マリアバン解析に基づく漸近分布論の導入により、確率微分方程式の確率論と数理統計学を結び付けるなど、画期的研究を行っている。国際的学術誌への貢献も多大であるばかりでなく、さらに数理ファイナンスなど応用分野の研究にも大きな影響を与えている。これまでの研究成果に対しては、既に日本数

学会、日本統計学会などの賞を受賞、確率統計学の主要な研究者として我が国の統計学界の発展に多大な貢献があった。

主要業績：

1. Asymptotic expansions of maximum likelihood estimators for small diffusions via the theory of Malliavin-Watanabe, *Probab. Theory Related Fields*, 92, 275-311, 1992.
2. Estimation for diffusion processes from discrete observation, *J. Multivariate Analysis*, 41, 220-242, 1992.
3. Malliavin calculus and asymptotic expansion for martingales, *Probab. Theory Related Fields*, 109, 301-342, 1997.
4. Conditional expansions and their applications, *Stochastic Processes and their Applications*, 107, 53-81, 2003.
5. On covariance estimation of nonsynchronously observed diffusion processes, *Bernoulli*, 11, 359-379, 2005, with T. Hayashi.

### 2.2 受賞のことは

吉田 朋広（東京大学）

このたびは素晴らしい賞を頂き光栄に存じます。平成19年の研究業績賞を頂戴したときの喜びも大きなものでしたが、今回は伝統ある学会賞に、

喜びとともに、歴代の受賞された先生方のお名前を拝見し身の引き締まる思いであります。

これまで、確率過程の統計学という比較的新しい分野を研究してきました。おもな研究対象として、確率微分方程式やそれを含むセミマルチンゲールと呼ばれる確率過程を扱い、漸近理論を課題にしてきました。70年代後半に、Yu. Kutoyants教授によって、漸近決定論のIbragimov-Khasminskii理論を基礎とする、拡散過程と点過程に対する統計学の建設が始まり、80年前後には、A. Shiryaev教授らのソ連、J. Jacod教授らのフランスのグループ等の貢献によって、セミマルチンゲールの分布の絶対連続性と中心極限定理（より一般に独立増分過程への収束）が確立し、セミマルチンゲールの統計学が体系的に議論され始めました。確率積分に対する中心極限定理が確率過程の統計学の研究を背景に生じたことはあまり知られていないようですが、記憶にとどめるべき事実で、私が研究を始めた80年代半ばはそのような、統計学と確率論の必然的、（一方的でなく）双方向的な協働が予感される時期でした。ちなみに、非エルゴード的統計学の影響でセミマルチンゲールの安定的収束が証明されたのもこの頃で、安定的収束は、技術的には当時と異なるものの、近年拡散係数の推定問題において再び重要な概念になっています。

Malliavin calculus（マリアバン解析）を統計学に入れ、摂動のある確率微分方程式の推定量の漸近展開を研究し、オプション価格の漸近展開法を副産物として得た経緯については2年前の会報でお話しました。その後この方法が国友直人教授、高橋明彦教授らによってファイナンス分野で推進され多くのユーザを得たのはご存知の通りで、望外の喜びです。摂動モデルに対して一般的な漸近展開公式を学会誌（1992）に掲載頂き、その後の私の興味は、本来の課題であった、真に分布論的な漸近展開へ向かいました。

もとより解析したいモデルが確率解析で記述されているため、マルチンゲールの分布の漸近展開は避けられない問題でしたが、当時はこのような

確率論的にも基礎的な結果がない状況でした。統計数理研究所の研究報告会のため1週間ほど集中し、マルチンゲールの漸近展開の公式を与え、正当性を証明することができました。漸近展開には確率分布の滑らかさが必要です。独立観測の場合には実用的な条件としてCramér条件がありますが、確率解析の対象においてはMalliavin共分散の漸近非退化性が実効性のある条件であることを示しました。応用として、エルゴード的な拡散過程の漸近展開が導かれ、最尤推定量の漸近展開も初めて得られました。高次で非正規極限構造を持つ拡散係数の推定量の漸近展開も導かれ、これはマルチンゲール漸近展開の汎用性を示しています。

1994年6月からパリ第6大学に在外研究のため滞在しました。ホストはJacod教授で、受け入れ準備のためにKutoyants教授にもご尽力頂きました。私の海外での活動は前年パドバ（イタリア）での国際会議に招待されたのが実質的に最初で、32歳という遅いスタートでした。パリ滞在中はマルチンゲールの漸近展開の応用に関して研究しました。エルゴード的拡散過程においてMalliavin共分散の漸近非退化性を証明することは類型がなかったため時間がかかりました。V. Bally教授との議論は役立ちました。パリの風景は美しく、戸外でものを考えることが好きでした。シャンゼリゼをすこし入ったMarigny劇場前の公園のベンチがお気に入りの“研究室”でした。この場所はその後も通りがかったときはしばしば研究室となっています。

同年9月にベルリンの国際会議で発表をしてのち、いろいろな所から招待されヨーロッパを移動することが多くなり、多くの人との出会いがありました。ある日研究室に出てくると、Malliavin先生からのメッセージが置いてありました。先生が日本での長期滞在を終えフランスに戻られた後のことです。セミナーで話をし、その後も懇意にいただいております。先生の博識は驚異的で、パリの真ん中にあるご自宅で数学や歴史のお話を伺うのは私にとって至福の時間です。前はMalliavin先生も研究されている非同期共分散推定

の問題を議論しましたが、専門を越えて、しかも統計としても最先端の話をされるお姿は、これまで私もあまりにも当たり前のように意識していませんでしたが、驚嘆に値し、遊戯三味の境地とはまさしくこのことではなかろうかと感じます。

帰国後はミキシング  $\varepsilon$  マルコフ過程の漸近展開を研究しました。マルチンゲールの漸近展開とこの方法は相補的な関係で、通常のエルゴード的な場合にはこの方法がより有効です。汎関数の漸近展開に関する結果はその後PTRFの2本の論文として発表しましたが、応用にはさらに膨大な計算と解析学的な議論が必要です。阪本雄二氏、内田雅之氏らと研究を進め、ミキシング性のある非線形時系列に対して、実用的にはおそらくすべて含むと思われる一般展開公式を得ました。95年から99年頃のことです。

時間はずっと飛び、現在研究している課題の一つを上げますと、混合正規型極限（いわゆるLAMNで、安定的収束が問題となるような状況）でのマルチンゲールの漸近展開があります。これまで理論はなかったのですが、1年半ほど前に解決し、目下応用を含めて研究を進めています。有限時間離散観測での拡散係数の推定量の漸近展開に応用でき、多項式型大偏差不等式、非同期共分散推定量の研究と今後合流してゆくはずです。さらに、この研究は条件つき分布の漸近展開と表裏で、部分Wiener多様体上の漸近分布論・漸近展開の理論の構築を試みています。マルチンゲール等確率過程に対する漸近展開の理論および漸近決定理論、無限次元確率解析、セミマルチンゲールの極限定理、サンプリング問題等、それぞれに固有の容易でない課題を含んでおり、基礎研究がまず必要ですが、それらの解決とともに統合することで応用問題が解決されるところが確率統計学の醍醐味といえます。

DYNSTOCHミーティングでベルリン滞在中にこの原稿を書いています。DYNSTOCHミーティングは、毎年ヨーロッパで開かれる確率過程の統計学に関する国際会議です。今回もA. Shiryaev, J. Jacod, Yu. Kutoyants, U. Küchler, M. Sørensen, E.

Eberleinといった方々が参加し、多くの研究者が最先端の研究を発表し、活発な議論が行われています。参加者多数のためポスターセッションも開かれています。日本のチームは全員が口頭発表の機会を与えられました。この分野の先端的な会議に Statistique Asymptotique des Processus Stochastiques (SAPS) があります。これはYu. Kutoyants教授が主宰するもので、2年に一回ルマン（フランス）で開かれます。今春の第7回大会ではI. Ibragimov教授、R. Khasminskii教授も参加され、文字通り確率過程の漸近推測論の国際会議といえます。私はこれらの会議に育てられたと思います。ちなみに、SAPSでは私が最初の講演者でKutoyants教授が取をつとめることになっているようです。そのせいか、今年DYNSTOCHミーティングでもオープニングを務めました。

話題は尽きないのですが、さきがけプロジェクトに触れておきたいと思います。科学技術振興機構（JST）の戦略的創造研究推進事業さきがけの数学領域「数学と諸分野の協働によるブレークスルーの探索」（領域総括 西浦廉政教授）の課題に初年度より採択され、確率統計学の理論研究とその応用として確率微分方程式のシミュレーション・統計解析ソフトウェアの開発を行っています。確率微分方程式の統計理論は多くの推測方式を提案していますが、その計算は普通簡単ではなく、ソフトウェアとして実装することによってこの分野の研究者に限らず非専門家でも容易に最新の結果を利用できる環境を構築しようという試みです。日本とイタリアの研究者の協力を得て事業を進めており、コア部分のリリースも間近です。

最近、Bernoulli Societyの仕事に仰せつかり、アカデミックサイド一般に関して、会長や他のExecutive Committeeメンバとともに働いています。日本統計学会とのさらなる協力も今後増やせればよいと思います。

私の研究は我が国の統計学・確率論の伝統の上にあり、それを抜きにして成り立ち得ません。それを日々支えて下さっている会員の皆様にもう一度感謝申し上げ、この稿を締めくくりたいと思い

ます。

### 3. 第5回日本統計学会統計活動賞について

#### 3.1 日本統計学会統計活動賞

美添 泰人（日本統計学会会長）

日本統計学会統計活動賞は、研究や教育に限らず、広く統計学および統計の分野において高く評価しうる活動を顕彰するために2005年度から始められたものです。第5回受賞者は

間瀬 茂 氏（東京工業大学）

に決定いたしました。受賞者には、賞状と賞牌が贈呈されました。受賞理由と略歴は以下のとおりです。

受賞者氏名：間瀬 茂 氏

略 歴：1976年3月 東京工業大学大学院理工学研究科数学専攻博士課程修了，1976年4月 東京工業大学理学部助手，1979年8月 広島大学総合科学部講師，1982年4月 広島大学総合科学部助教授，1993年10月 広島大学総合科学部教授，1997年4月 東京工業大学情報理工学研究科教授。

受賞理由：統計学の研究及び教育のためには優れた統計解析用ソフトウェアを用いる必要がある。教育のためのみならず研究のためにも高価な商用ソフトウェアではなくフリーソフトウェアに利用が広がっている。

統計解析用のフリーソフトウェアの中ではR言語が最も著名でありよく使われている。間瀬氏はR言語が開発された、日本に導入された頃から、その普及に努めている。特に、その日本語化、ライブラリ（Tips）の構築、質問掲示板の運営等に対して貢献した。さらに、R言語に関するWikiであるRjpWikiの運営にも協力しており、間瀬氏のR言語の普及のための貢献は多大であり、顕彰するに相応しいものである。

主要業績：

1. 間瀬 茂 (2007) Rプログラミングマニュアル

ル。数理工学社。

2. 間瀬 茂・鎌倉稔成・金藤浩司・神保雅一 (2004) 工学のためのデータサイエンス入門：フリーな統計環境Rを用いたデータ解析。数理工学社。

3. 間瀬 茂・武田 純 (2001) 空間データモデリング：空間統計学の応用。共立出版。

4. Mase, S. (1986) On the possible form of size distributions for Gibbsian processes of mutually non-intersecting balls. J. Applied Probability, 23/3, 646-659.

#### 3.2 受賞のことは

間瀬 茂（東京工業大学）

今回の突然の受賞の連絡に正直驚いています。日本における統計システムRの普及に貢献したという受賞理由ですが、これは私一人というよりは、Rの魅力にいち早く魅せられた多くの人の貢献だからです。しかしながら、Rが統計ユーザの使うソフトの最初（そしてもしかすると唯一の）の選択になりかけている現在、これらの人々の献身的な活動を記憶にとどめるためにも、その一員として受賞するのは意味があると考え、ありがたく頂戴することに致します。

私がRを知るきっかけは、講義で実際にデータ解析をさせたいと考えたからでした。久しくLinuxに慣れたものにとって、Sシステムを除けば、当時の標準的統計システムは、いかにも使い勝手が悪く思えました。また、自宅で、そして社会に出て使えない高価な商用ソフトを教えても仕方が無いと考えました。そんな時、Sシステムと互換性があるオープンソースのRの存在を知りました。当時まだバージョン0.6という段階でしたが、既にかかなりの完成度でした。Rが最初から模範としてきたS-PLUSの優れた特徴を取り入れたシステムは使いやすく、たちまちその魅力にはまりま

した。

そうした折、商品先物取引業務にRを使っているという人物が入門マニュアルの日本語訳を始めたことをしりました。早速拝見すると、まったく荒唐無稽な訳でした。こうしたマニュアルは、技術英語の知識に加え、統計学や計算機に関する知識がなければ正確な翻訳は不可能です。これでは困ると考え、丁重にその作業を取り上げることにしました。しかしながら、この一件により、自由に使える統計システムを一般ユーザが必要としている、そして日本語による情報が不可欠である事実気づきました。これが私のR普及活動の原点です。

これをきっかけとし、当時既にRを使い始めていた何人かによる翻訳チームが誕生しました。とくに筑波大学の岡田昌史氏は、ML R-jp, CRAN ミラーサイト、そして情報蓄積サイトRjpWikiを創設・運用するという裏方作業を今に至るまで続けてられました。彼こそがR普及の最大の貢献者です。その後私は、自分の勉強を兼ね、Rの公式マニュアルの翻訳作業にはまることとなりました。今思えば怪しい訳ですが、情報の乏しかった当時は結構重宝されたようです。

現在の世界的なRの普及の最大の原動力はB. Ripley氏によるWindowsへの移植でしょう。一方で日本における普及の最大の障害は、日本語の問

題でした。日本のRユーザのコミュニティが確立し始めたころ、突然Rを日本語化しましたという大ニュースが飛び込んできました。当時フリーのプログラマであった中間栄治氏は、卓越したプログラミング能力で、その後Rと関連機能の日本語化、さらには国際化を推進してられました。彼のコードは現在R本体の正式な一部になっており、日本の誇る貢献です。今ひとつの日本人による重要な貢献は、後藤和茂氏による高速線形演算ライブラリLibGotoで、Rの高速化に不可欠になっています。

現在、R使用を前提とした出版が世界的に活況を呈しています。ユーザ提供の貢献パッケージの数も二千に及ぼうとしています。統計的手法の共通基盤というRの最初からの目標は現実のものになっています。日本においてもすでにR本が過剰の感すらあり、私のような古参ユーザは驚くばかりです。ここでお名前を述べられなかった多くのボランティア諸氏とともに、こうした奔流の源流となれたことを、密かな誇りとしています。無論、普及活動のせいというよりは、Rシステムの素晴らしさ自体が最大の原因であることは言うまでもありません。最後に、Sシステムの普及に尽力され、結果としてRの普及の素地を用意された渋谷政昭、柴田里程両氏のご功績に言及してこの小文を終わります。

## 4. 第5回日本統計学会統計教育賞について

### 4.1 日本統計学会統計教育賞

美添 泰人（日本統計学会会長）

日本統計学会統計教育賞は、統計教育の研究および実践において、顕著な業績をあげた個人または団体を顕彰するために2005年度から始められたものです。第5回受賞者・受賞団体は

筑波大学附属駒場中学校・高等学校

菅野 栄光 氏（愛知県半田高等学校）

に決定いたしました。受賞者・受賞団体には、それぞれ賞状と賞牌が贈呈されました。受賞理由と

受賞者・受賞団体の略歴は以下のとおりです。

[1] 受賞団体：筑波大学附属駒場中学校・高等学校

略 歴：1947年東京農業教育専門学校附属中学校として開校。1952年東京教育大学附属駒場中学校・高等学校と改称。1978年筑波大学附属駒場中学校・高等学校と改称。2004年 国立大学法人筑波大学附属駒場中学校・高等学校となる。

受賞理由：筑波大学附属駒場中学校・高等学校は、2002年から文部省（現在の文部科学省）が指定す

る科学技術，理科・数学教育を重点的に行う「スーパーサイエンススクール（略称SSH）研究事業」に従事し，高等学校及び中高一貫教育校における理科・数学に重点を置いたカリキュラムの開発および大学や研究機関等との効果的な連携方策についての研究を推進する中で，とくに統計教育の普及に関して，下記にあげる特徴的な実績を示した。

1. 中学校，高等学校のカリキュラムの中で実効ある統計教育のための教材開発やカリキュラム開発を行った。
2. 統計の重要性と統計を学ぶことの楽しさを伝えるために，授業の一環として，統計の専門家による講演を継続的に実施した。
3. 全国の学校へ，授業モデルを発信し，中等教育段階での統計教育の先駆的な役割を担ってきた。
4. 卒業生アンケートを通して，中等教育における統計学習の需要の大きさを示した。

これらの貢献は顕彰するに相応しいものである。

#### 参考資料：

1. 高校と大学をつなげるカリキュラム開発の基礎研究（2002，2003，2004）。
2. 創造的な教材・指導法及びカリキュラムの開発（2005，2006，2007）。

#### [2] 受賞者氏名：菅野 栄光 氏

**略 歴：**東京大学大学院教育学研究科修士課程修了。私立東海中学・高等学校教諭，愛知県立常滑北高等学校教諭などを経て，現在，愛知県立半田高等学校教諭

**受賞理由：**菅野栄光氏は，中等教育のカリキュラムに統計的な内容が明確に位置づけられていない中で，統計教育の重要性を意識し，高等学校において「数学」だけでなく「情報」や「総合的な学習の時間」などをうまく利用して，統計教育の実践に取り組んできている。その内容は，生徒による調査・分析・プレゼンテーションや資料に基づ

くディベートなど，現在の統計教育で重要視されている課題解決力の育成を中心としており，その成果は日本数学教育学会や総務省統計局ウェブサイト，その他の研究会および全国数学教育学会誌等で継続的に論文発表され，関係者に生徒主体の活動的な授業形態として注目を集めている。また日本統計学会統計教育分科会主催の第5回統計教育方法論ワークショップにおいて，統計教育事例報告の中で発表され，ディベートを利用した取り組みによって統計の有効性と限界を生徒に意識させることができている点などが評価され，最優秀賞を獲得した。これらの貢献は統計教育賞にふさわしいものである。

#### 主要業績：

1. 「資料の整理と異教科間の連携—情報Bおよび総合的な学習の時間（ディベート）と数学—」，日本数学教育学会，第87回全国算数・数学教育研究大会，2005。
2. 「資料の整理と異教科間の連携」，第38回愛知県公・私立高等学校視聴覚教育研究大会，2006。
3. 「コンピュータを活用した統計教育（2変量の相関）—生徒による調査・分析・プレゼンテーション—」，日本数学教育学会，第89回全国算数・数学教育研究大会，2007。
4. 「高等学校におけるディベートを活用した統計教育—総合的な学習の時間および情報科と連携して—」，『全国数学教育学会誌，数学教育学研究』，第13巻，2007，pp.175-182。
5. 「高等学校における統計的リテラシーの育成—ディベートおよび統計局Webサイトの活用—」第16回名古屋大学数学教育セミナー，2008。
6. 「新「数学I」における数学的活動を重視した統計的リテラシーの育成—現行「数学B」における実践からの示唆と展望—」日本数学教育学会，第91回全国算数・数学教育研究大会，2009（予定）。

## 4.2 [1] 受賞のことは

牧下 英世 (筑波大学附属駒場中・高等学校)

### 1. はじめに

筑波大学附属駒場は、東京大学駒場キャンパス近くにある男子だけの中学校、高等学校です。学校の規模も中学3クラス、高校から1クラス増えて4クラスの小じまりとした不完全な中高一貫校です。高3の理系文系の生徒数は、およそ100対60で理系の志望の強い学校です。

このたび、本校数学科が日本統計学会から栄えある統計教育賞を頂きましたことに対してお礼を申し上げますとともに、これまでの本校数学科の統計教育の取り組みを報告させていただきたいと思えます。

### 2. 本校の統計教育

本校数学科による統計教育研究は、2002年に当時の文部省のSSH研究開発の指定校になったことが大きなきっかけです。本校のSSH研究では高大連携に関わり、大学での学びにつながる中学・高校の数学カリキュラムづくりとその教材開発が大きな目的です。

本研究ではまず、卒業生から大学での数学の学びについてアンケート調査を実施し研究の端緒としました。その結果明らかになったことは、理系に進学した者は「微分方程式」を高校時代に勉強していれば、理系における大学の学びがもう少しスムーズにいったのではないかという意見でした。当時のカリキュラムから微分方程式は除外されていたことの影響であると考えました。もう一点、「統計」が文系、理系を問わずに、大学の学びでは普通に必要であり、是非とも高校を卒業するまでにいわゆる記述統計ぐらいまでは学習しておくことの重要性が明らかになりました。そこで、数学科では「微分方程式」と「統計」についてカリキュラム研究と教材開発に着手しました。

本校では統計について、SSH以前には「推定」、「検定」までの内容を高校3年生のいわゆる文系の生徒が選択する数学で指導していました。先ほどのアンケート調査にも、この授業を取り上げて、高校生全員にこのぐらいの内容を指導したらどう

かという意見がありました。卒業生からの意見は研究の方向性を示してくれる有意義なものとなりました。

さらに、大学等の研究者による生徒対象の数学特別講座を実施しました。これらの内容は我々数学科教員も大きな影響を受けました。これまでに30ぐらいの講座を実施しましたが、統計に関するものは次の内容です。

- (1)「科学の文法：統計科学の創生と発展」(椿広計先生)
- (2)「現代ファイナンス理論入門」(永原裕一先生)
- (3)「政策への数理アプローチ」(藤田康範先生)
- (4)「医薬品の効果と安全性の評価」(岩崎学先生)
- (5)「組合せの確率モデル」(高木英明先生)
- (6)「統計学と機械学習理論とモデル選択」(小林景先生)
- (7)「オプション理論入門」(中島上智先生)
- (8)「確率の不思議に迫るモンテカルロ法」(中島上智先生)
- (9)「二項分布とランダムウォークの確率理論」(小林景先生)
- (10)「モノの価格のフシギ」(中島上智先生)
- (11)「コンビニのレシートデータ (POS) から見えるもの」(渡辺美智子先生)

この特別講座では、毎回講義録を作成し研究に役立てています。これらの講演の中から本校数学科教員による関連した教材開発の取り組みも行っています。

これらの研究内容をもとにして、数学科では中学と高校における次の統計カリキュラムを設定し、現在も教材を少しずつ整えています。次は大まかなものです。

中学でカリキュラム

- ・統計の基本
- ・近似直線
- ・正規分布と標準化

高校でカリキュラム

- ・回帰直線、相関係数
- ・残差分析によるデータ系列の関係分析
- ・主成分分析入門

特別講座をもとにした教材開発

- ・組合せの確率モデル
- ・EBIと確率・統計
- ・シミュレーションを用いた授業

### 3. おわりに

今回のこの栄えある統計教育賞の受賞を新たなスタートと考え、今後も本校数学科では、活用するための統計だけでなく、大学への学びにつながる数理統計的な内容についても、カリキュラムとその教材開発を推進し、それらの情報を全国に発信していきたいと思っております。

これまでにご教示いただいた先生方に改めてお礼申し上げますとともに、今後も本校の教育研究に対して、一層のご支援をよろしくお願い申し上げます。

## 4.2 [2] 受賞のことば

菅野 栄光 (愛知県半田高等学校)

この度は「日本統計学会統計教育賞」という名誉ある賞を授与していただき、大変光栄に存じます。ご推薦いただいた先生方、また、実践に協力してくれた生徒たちに感謝申し上げます。

2012年度から、高等学校数学科では、新学習指導要領による教育課程が先行実施されます。注目すべきは共通必修科目である「数学Ⅰ」に統計的な内容が付け加えられたことです。

現行の中等教育段階の数学科における統計教育の軽量化を憂慮する指摘は、様々なところでなされてきました。変化の激しい現代の情報化社会を生き抜くために必要な統計的リテラシーの育成は、学校教育の場で行うに値するものであり、それが次期学習指導要領に盛り込まれたことは嬉しいことであります。関係の先生方のご尽力に敬意を表します。

顧みますと、高等学校数学科の授業でまともに統計を教えたのは、1990年前後にまで遡ります。「確率・統計」という教科書で高校3年生を対象に行っておりました。その頃から比べると、現在の高等学校の教育環境は大きく変化しています。普通教科「情報」の導入に伴う、インターネット

に接続されたコンピュータを一人一台操作できる特別教室の整備、「総合的な学習の時間」に見られる、教科横断型の学習の可能性などです。

実は、今回受賞対象となった実践は、数学科以外の教科と連携しながら、少ない時間をやり繰りして行ったものであります。ベースとなったのは現行の数学科の「数学B」における統計分野なのですが、この科目は単元選択制になっています。大半の高等学校では大学受験を強く意識し、数列やベクトルの単元を選択するため、統計までは手が回らないのが実情です。苦肉の策として、情報や総合の時間を利用するといった手段を用いました。

大きく分けて2つの実践を行いました。1つは統計資料を論拠としたディベート、もう1つは総務省統計局のWebサイトにある統計資料を活用したプレゼンテーションです。どちらも生徒主体の活動を重視した実践で、高校生たちは熱心に取り組んでくれました。数学的な知識や概念はもちろん「数学B」の教科書を使って説明を行うのですが、それをいかに身近に感じ、意味あるものとして捉えるかというねらいでディベートなりプレゼンテーションなりの活動を入れました。例えば、相関係数について教科書でその定義を教えた後、そこに載っている木の幹の太さと高さなどを扱った少々味気ない練習問題を離れて、現実のデータに触れさせました。Webサイトにある都道府県別データから生徒自身が2変量を選び、表計算ソフトを利用して相関係数を調べる、といった活動です。サイトを活用して、生徒の興味に応じて好きに変量を選ばせると、本当に一生懸命取り組むものだと感じました。無論、自由に好き勝手やらせておしまいではありません。ですから、教科書の範囲内で演習を行うのに比べて、教師側の準備や負担も増大します。生のデータを使うことにより、その解釈をめぐって窮することもあります。そこまでは高等学校数学科の守備範囲ではない、という考え方もあります。しかし、統計的リテラシーは数学科だけで指導するものではありませんし、様々な教科や総合学習など学校教育全体の場

で指導していく必要性を感じます。場合によっては地歴・公民科の先生の助けを借りる、といったことを視野に入れてもよいのではないのでしょうか。

これから統計教育が高等学校数学科のメインストリームに登場します。必修科目で行うということと、ほとんどすべての高校教員に

その指導の場が回ってくるということになります。国民全体の統計的リテラシー向上のために学校教育が受け持つ役割は非常に大きいと存じます。新課程の実施を目前に、Webサイト活用を視野に入れた授業展開の開発を進めておりますが、ご意見・ご指導などいただけましたら幸いです。

## 5. 第3回日本統計学会研究業績賞について

### 5.1 日本統計学会研究業績賞

美添 泰人（日本統計学会会長）

日本統計学会研究業績賞は、統計学および関連分野において優れた研究業績をあげた研究者を顕彰するために2007年度から始められたものです。第3回受賞者は

- ・西山 慶彦 氏（京都大学）
- ・Peter M. Robinson 氏  
（London School of Economics）（共同受賞）
- ・駒木 文保 氏（東京大学）

に決定いたしました。受賞者には賞状と賞牌が贈呈されました。受賞理由と略歴は以下のとおりです。

**受賞者氏名：**西山 慶彦 氏

**略 歴：**1986年 京都大学経済学部卒業，1989年 京都大学経済学部修士修了。1996年 名古屋大学情報文化学部講師。2000年 ロンドン経済大学Ph. D.を取得。2001年 名古屋大学環境学研究所助教，2002年 京都大学経済研究所助教，2005年 京都大学経済研究所教授。

**受賞者氏名：**Peter M. Robinson 氏

**略 歴：**1968年 ロンドン大学卒業，1969年 ロンドン経済大学修士，同年ロンドン経済大学講師。1973年オーストラリア国立大学Ph. D.を取得。1973年ハーバード大学助教を経て1984年からロンドン経済大学教授。

**受賞理由：**西山氏とロビンソン氏は、この2つの

論文において、平均デリバティブのセミパラメトリックな推測に多大な貢献をした。特にブートストラップ法が高次漸近性の下で適切な挙動を示すことを明らかにした。セミパラメトリック推測の高次漸近構造を解明したばかりでなく、実用で広く使われているブートストラップ法の理論的サポートを行ったことは高く評価されている。

これらの貢献は顕彰するに相応しいものである。

**主要業績：**

1. Nishiyama Y. and P.M. Robinson (2000) “Edgeworth Expansions for Semiparametric Averaged Derivatives,” *Econometrica*, Vol.68, No.4, 931-979.
2. Nishiyama Y. and P.M. Robinson (2005) “The Bootstrap and the Edgeworth Correction for Semiparametric Averaged Derivatives,” *Econometrica*, Vol.73, No.3, 903-948.

**受賞者氏名：**駒木 文保 氏

**略 歴：**1987年 東京大学工学部計数工学科卒業，1989年 東京大学大学院工学系研究科計数工学専攻修士課程修了，1992年 総合研究大学院大学数物科学研究科統計科学専攻博士課程修了，1992年 東京大学工学部助手，1995年 統計数理研究所助教，1998年 東京大学大学院工学系研究科助教，2001年 同大学院情報理工学系研究科助教，2007年 同准教授，2009年 同教授。

**受賞理由：**ベイズ統計学における重要問題である事前分布の選択に関して、予測分布の評価という

枠組みを設定し、この枠組みに情報幾何学の方法を応用して、深い理論的な結果を導出した。特にモデル多様体の大域的な性質を利用して結果を導出している点が特筆に値する。具体的には、まずベイズ法に基づく予測法の方が未知パラメータに推定量を代入する古典的な予測法より漸近的性能が良いこと、そして両者の性能の差が統計モデルの曲率によって表せることを1996年のBiometrikaの論文において示した。続いて2004年のAnnals of Statistics論文では、多変量ポアソンモデルの場合に、有限標本の場合を含めて予測分布の最適性に関する厳密な諸結果を証明している。2006年のAnnals of Statistics論文では、統計モデルの多様体の大域的な微分幾何学的性質を調べ、一般的なモデルにおいて、グリーン関数の存在という条件のもとで、Jeffreys事前分布などの従来の無情報事前分布を漸近的に改良する一般的な方法を与えている。さらに2007年のAnnals of Institute of Statistical Mathematicsの論文においては、location-scale familyにおいて最良な位置尺度不変な事前分布を優越する事前分布を導出している。

これらの研究成果は数理統計学の研究として、オリジナリティーの非常に高い成果であり、最近で多数の海外の研究者が、上述の結果に基づいた実用上有用な結果を発表している。

#### 主要業績：

1. Komaki, Fumiyasu. On asymptotic properties of predictive distributions, Biometrika 83(1996), no.2, 299-313.
2. Komaki, Fumiyasu. Simultaneous prediction of independent Poisson oservables, Ann. Statist. 32(2004), no.4, 1744-1769.
3. Komaki, Fumiyasu. Shrinkage priors for Bayesian prediction, Ann. Statist. 34(2006), no.2, 808-819.
4. Komaki, Fumiyasu. Bayesian prediction based on a class of shrinkage priors for location-scale model, Ann. Inst. Statist. Math. 59(2007), no.1, 135-146.

## 5.2 [1] 受賞のことは

西山 慶彦 (京都大学)

この度は、共著者のPeter M. Robinson教授と共に日本統計学会研究業績賞を受賞し、大変光栄に感じております。私の大学院時代の恩師である京都大学経済学研究科森棟公夫先生、留学時代の恩師であるPeter M. Robinson先生、その後シンポジウム、研究会、セミナー等を通じてご指導を頂きました学会の皆様方に深く感謝する次第です。

受賞論文の1件目は、私の学位論文の一部を投稿したもの、2件目は学位論文で得られた結果を拡張したものです。それらの論文においては、ある種のセミパラメトリック回帰モデルの有限次元パラメータの推定量の分布に関してエッジワース展開を導出し、それがブートストラップ分布と漸近のも同等であることを示しました。これらは推定、検定等の応用上直接的に役立つものではないかもしれませんが、推定量の精度、検定の際の経験サイズの歪みに関する定性的な結果を与えるものと解釈できます。1980年代の後半頃から、ノンパラメトリック推定量を含む形で定義されるセミパラメトリック推定量が一定の条件下でsquare-root-nのオーダーで収束することが示され、当時は驚くべき結果と理解されていました。受賞論文の研究を行っていた当時は、高次ではセミパラメトリック推定量がどのような漸近的性質をもつか、まだよく知られていない段階で、この問題を扱った研究が幸いにもEconometricaに掲載されました。その後、この方向への研究が進み、多くのセミパラメトリック推定量の分布について、エッジワース展開とブートストラップ分布が同等の近似を与えることが示され、私の理解では現在は細かい部分を除けばほぼ終息しつつあります。現在は、セミパラメトリック計量経済学は、回帰といった一般的な問題ではなく、経済モデルや個人の行動を記述するモデルに基づいてより複雑に特定化されたシステムに関する統計モデルを推定、検定するという手法の開発に向かっています。この分野はどの部分をパラメトリックに表現し、どの部分をノンパラメトリックなまま残しておくかを

適宜定めることによって、多種多様なモデルの可能性を有しており、今後も様々な形でのモデル化、その推定、検定法の研究が行われていくことと期待しております。

ノン・セミパラメトリック分析の分野に限らず、今後も統計学、計量経済理論に関する研究を行い、少しでもその発展に貢献できるように努力して参りたいと考えております。重ねて、この度はありがとうございました。

## 5.2 [2] 受賞のことは

Peter M. Robinson

(London School of Economics, UK)

I am extremely grateful to the Japan Statistical Society for this great honour, and I only wish I could have come to the ceremony.

The paper co-authored with Professor Nishiyama, and honoured by the Society, develops the research he did for his PhD at the London School of Economics under my supervision in the 1990's. In fact part of his PhD research was published in another paper in *Econometrica*, as well as in a paper in a Festschrift volume in honour of Professor Takeshi Amemiya (another Japanese scholar!). Professor Nishiyama's PhD research made a major contribution to semiparametric methods and theory. Since the mid-1980's statistical and econometric interest in semiparametric modelling and inference grew considerably. The semiparametric model comprises a partial parameterization, along with a nonparametric nuisance function, but the parameters can be estimated with the same rate of convergence as in a fully parametric model. However, it is possible that the semiparametric estimates may have inferior finite-sample properties relative to those of a correctly specified fully parametric model. My interest, in the early 1990's, was in the investigation of this question by means of higher-order asymptotic theory, and Professor Nishiyama did this admirably in his PhD thesis. Indeed, of all the PhD theses I have supervised,

there is none that turned out so much as I had planned, despite the technical difficulty and complexity of the work. After establishing valid Edgeworth expansions, his PhD thesis developed more accurate rules of statistical inference than those provided by the usual normal approximation. Later, our 2005 *Econometrica* paper, honoured by the Society, showed that the same accuracy can be achieved by a bootstrap, and also considered further issues of bias-reduction, hypothesis testing and bandwidth choice. It is nice to think of Professor Nishiyama's work as following the distinguished Japanese tradition in finite-sample and higher-order asymptotic statistics and econometrics. As one amusing personal memory, when Professor Nishiyama came to my house while he was a student I made him green tea and he told me it should be stronger! I have learnt the lesson! I feel very proud of the contributions he has made to teaching and research, and his leadership activities, in Japan.

I was delighted to continue my collaboration with Professor Nishiyama after his return to Japan, to be able to publish a further co-authored paper with him in *Econometrica* (a challenging prospect nowadays), and as a result, be so honoured by the Japan Statistical Society.

## 5.2 [3] 受賞のことは

駒木 文保 (東京大学)

このたびは、このような賞をいただき、大変光栄に存じます。

東京大学、総合研究大学院大学でご指導いただいた先生方、また、統計数理研究所、東京大学で同僚であった普段から研究上の刺激を受けている皆様にお礼を申し上げます。

この研究を始めるきっかけとなったのは、博士号を取得後しばらくたった頃、統計の教科書の一部を自分にとって解かり易い形に書き直そうとしたことでした。

数理統計の教科書では、パラメータ推定について多くのページを割いて解説がなされます。最尤

推定量は不変量ですが、その評価に平均2乗誤差のような不変性の無い量が現れるのが不思議でした。不変性を意識するようになったのは、大学3年生の時に幾何の講義を受けてからです。その時のテキストが伊理正夫・韓太舜著「テンソル解析入門」教育出版で、ジャガイモの横にねじ曲がった針金が浮かんでいるような変わった図が沢山載っていました。かなり一生懸命勉強したのですが内容をすべて理解するには至りませんでした。それでも不変性が見やすい形に理論を表現することにより本質が見えることがあることに感動したことを記憶しています。また、4年生の卒論研究の際甘利俊一先生のSpringerの情報幾何学のレクチャーノートを読み、深い内容に感激しました。この本が最初に通読した統計の本となりました。このような経験から、なるべく不変性が見やすくなるように議論を進めようと考えました。

さらに、統計的推測において本質的な量が本当にパラメータなのかという点も問題になります。私が総合研究大学院大学の統計科学専攻で松縄規先生、尾崎統先生、尾形良彦先生の指導のもとで書いた博士論文では、赤池情報量規準を用いてベイズ統計モデルの良さの評価をしています。赤池情報量規準の理論ではパラメータよりも分布が本質的な量になります。そこで、パラメータ推定ではなく予測分布の評価という視点から理論を構成しました。予測は、パラメータ推定を含むと見なせませすし、モデル選択や情報理論などと自然な繋がりががあるためより本質的で広がりがあるように感じられます。

以上のような枠組みで考えてみると、すっきり

理解しやすくなるのが確かにあることが解ってきました。簡単な一例をあげると、ベイズ理論で必ず扱う事前分布の確率密度は密度量なので、スカラー量に比べると扱いにくさがあります。その点を意識しないと本質を見失いがちになります。スカラー量で話が済むように工夫しながら計算をすすめると格段に見通しが良くなります。さらに研究を進めるうちに、従来の統計学で利用される微分幾何学は局所的な性質で十分でしたが、ベイズ統計を理解するには体積増大度などのある種の大域的な性質が本質的な役割を果たすことが解ってきました。このような研究の試みを通して統計的推測についての理解が進んだと感じています。

最近では、海外の会ったことの無い研究者から思いがけない反応をいただくこともしばしばあり、予測分布の枠組みでE.I. George教授、L.D. Brown教授、M. Ghosh教授など、アメリカ、イタリア、インド、イギリスなどの研究者のグループが良い結果を次々と出しています。また、私の勤務する東京大学でも工学系研究科・情報理工学系研究科出身の伏木忠義、小林景、清智也、田中冬彦、鈴木大慈の各氏や、経済学研究科出身の加藤賢悟氏などの若手研究者が大変優れた結果を得ています。このような研究の広がりには望外のことで

統計科学における予測理論について本当に満足のできる一般論を構築するには、まだ困難な課題が多くあります。今後とも研究の視野を広げながら問題に取り組んで参りたいと考えています。

## 6. 第2回日本統計学会出版賞について

### 6.1 日本統計学会出版賞

美添 泰人（日本統計学会会長）

日本統計学会出版賞は、統計学及びその関連分野において優れた図書（研究、教育あるいは啓蒙）を出版した著者、編者、訳者あるいは出版社を顕

彰するために2008年度から始められたものです。

第2回受賞者は

- ・小西 貞則氏（九州大学）
- ・北川 源四郎氏（統計数理研究所）

（共同受賞）

に決定いたしました。受賞者には賞状と賞牌が贈呈されました。受賞理由と略歴は以下のとおりです。

**受賞者氏名：**小西 貞則 氏

**略 歴：**1972年 広島大学理学部数学科卒業，1974年 広島大学大学院理学研究科修士課程修了，1974年10月 広島大学理学部助手，1980年 統計数理研究所研究員，室長，助教授を経て，1994年4月 九州大学理学部教授，1994年6月 九州大学大学院数理学研究院教授，現在に至る。

**受賞者氏名：**北川 源四郎 氏

**略 歴：**1971年 東京大学理学部数学科卒業，1974年 東京大学大学院理学系研究科博士課程中退，同年 統計数理研究所研究員，1985年 同助教授，1991年 同教授・総合研究大学院大学教授，2002年 統計数理研究所長，2004年 情報・システム研究機構理事。

**受賞著作：**Sadanori Konishi and Genshiro Kitagawa (2008), *Information Criteria and Statistical Modeling*, Springer.

**受賞理由：**情報量規準構成のための基本的な考え方を，理論的な枠組みの中で統一的に整理し，一般的な読者にもわかりやすく説明している。さらに，非線形モデリングの手法を中心として，その中でモデルの評価に焦点を当て，様々な方法で構築されたモデルのよさを評価するための基準を導出するための基本的な考え方を解説している。また，その根底にある理論・方法論を情報量およびベイズ・モデリングの観点から紹介し，今後の理論的な発展に寄与している。

この著作のような理論面での精緻さだけでなく実務家にも有用性が実感できる図書は稀であり，その両面を満たしている本書は統計学に対する貢献が極めて大きい著作であるといえ，敬意をもって高く評価することができる。

**主要業績：**

1. 小西貞則・北川源四郎 (2004) 情報量規準。朝倉書店。

2. Konishi, S. and Kitagawa, G. (2003) Asymptotic theory for information criteria in model selection - functional approach. *Journal of Statistical Planning and Inference*, 114, 45-61.

3. 北川源四郎・小西貞則 (1999) 一般化情報量規準GICとブートストラップ。統計数理, 47, 375-394.

4. Konishi, S. and Kitagawa, G. (1996) Generalized information criteria in model selection, *Biometrika*, 83/4, 875-890.

## 6.2 受賞のことば

小西 貞則 (九州大学)

北川 源四郎 (統計数理研究所)

この度は，著書“Konishi, S. and Kitagawa, G. (2008). *Information Criteria and Statistical Modeling*, Springer, New York”に対して，日本統計学会出版賞を授与していただきまして，本当にありがとうございました。毎年，多数の図書が出版されている中で，本書に対して出版賞という荣誉ある賞を与えていただきましたことに，心から感謝申し上げます。英語での出版ということもあり，取り上げる項目や内容などに加えて，英文の推敲に互いにかかなりの時間を掛けたこともあり喜びもひとしおです。

自然現象や社会現象の解明と予測・制御，そして新たな知識発見には，現象の情報源であるデータに基づくモデリングが不可欠です。モデリングは，現象を近似する数理的モデルの想定，想定したモデルのデータに基づく推定，そして推定したモデルの評価という一連のプロセスからなります。特に，重要な役割を担うのが，主観的に想定した複数のモデルをデータに基づき客観的に評価して適切なモデルを選択するモデル評価基準です。

本書は，特にモデルの評価と選択に焦点を当て，様々なモデリングの実例を取り上げています。その原点は，言うまでもなく，自然科学・社会科学のあらゆる分野で応用され，現象解明と知識発見に多大な貢献をしてきた故赤池弘次博士の情報量規準AICにあります。この情報量理論に基づく

AICのモデルの評価と選択に対する統計的な考え方と根底にある理論体系の紹介を一つの目的としています。さらに、AICの基本的な考え方を踏襲したモデル評価基準、バイズ理論に基づくモデル評価基準、ブートストラップ情報量規準など様々なモデル評価基準の導出過程を、理論的厳密さを可能な限り失うことなく示したことに本書の特徴があるかと思います。

近年、計算機システムと計測・測定技術の高度な発展によって、生命科学、地球環境科学、シス

テム工学、経済学、マーケティングなど諸科学の様々な分野で大量かつ複雑なデータの獲得と蓄積を可能としてきました。このような状況の中で、多様なデータの中から有益な情報やパターンを高効率に抽出するための新たな統計解析手法、そして新たなモデル評価基準の開発研究が切に求められています。本書がこのような開発研究の一助になるとともに、日本に起源をもつ統計的モデリングの方法の普及に繋がれば、大変うれしく思います。

## 7. 第23回日本統計学会小川研究奨励賞について

### 7.1 日本統計学会小川研究奨励賞

受賞者氏名：西山 陽一（統計数理研究所）

受賞論文：Donsker's theorem for discretized data, *Journal of the Japan Statistical Society*, Vol.38, No.3, 505-515, 2008.

受賞論文と西山氏について

Richard D. Gill (Leiden University)

It is a great honour for me to be asked to write some words about the paper of Yoichi Nishiyama, "Donsker's Theorem for Discretized Data". The paper shows that discretization of continuous data does not hurt the usual Kolmogorov-Smirnov test, if the discretization is mild enough; for stronger discretization a simple adaptation of the test allows one to still use the usual asymptotic distribution.

Yoichi did a PhD under my supervision at my former position in Utrecht, the Netherlands; his 1998 thesis was entitled "Entropy Methods for Martingales". Actually he was already an independent researcher when he arrived in Holland in 1996; his thesis refined, unified and continued his earlier work in Japan on marrying modern empirical process theory based on entropy with modern martingale central limit theory in the context of the general theory of continuous time stochastic processes. I learnt much

more about these topics than I had known before, from watching the fruition of this project from close by, and discussing the results and their presentation and ways to go next.

Though some people at that time might have hoped and guessed that martingale central limit theory could be extended from ordinary real-valued martingales to the situation of margingales taking values in infinite dimensional spaces, it was a *tour de force* of just one person to actually carry out this programme, a tour de force which required a sustained effort over many years, attention to detail, deep understanding of both of the theories which were to be brought together, and much creativity to discover the "right" definitions, and to invent the "right" generalizations, in order to discover/create beautiful theorems with elegant proofs. It is important to add that this abstract looking theory has important applications in survival analysis and mathematical finance and elsewhere.

However, I am not supposed to be writing about Yoichi's former work, but about the paper which has won a prize from the Japanese Statistical Society. I wanted to describe his earlier work in order to emphasize the characteristics of his style in mathematics, which are common both to his monumental thesis (published as a monograph at the CWI, Amsterdam), and to the present little paper (a

little jewel). In the paper he establishes some results which one might have expected to have been known for a long time. For some people they may even be part of “mathematical-statistical folk-lore” ; but these people will not be able to give you a reference to a clean theorem with the sharpest possible results. Moreover, what is folk-lore to some experts might not be known or understood at all in applied statistics, or elsewhere where mathematical statistics is used, and since the situation studied in the paper is very common, it is very important to set out clearly and definitively exactly what is true and what is not true.

There are possibly many ways to derive the results in this paper, and the important thing is to get them by powerful and elegant tools, so that the truth of the results becomes almost immediately obvious, once one sees the route which is being taken to get them. A theorem which is true because of the results of pages of tedious calculations is a theorem which you do not understand. The good theorems in mathematics are the ones which have beautiful and surprising and elegant proofs, so that one learns much more than just *that* some abstract mathematical statement is true or false, but one understands exactly *why*, and understands that it is true because of surprising connections to other areas or because of other beautiful results whose power is thereby illustrated again.

With utmost clarity and efficiency, and very careful attention to every word and symbol, the paper gets the most powerful and general results in a most economical way. Yoichi presents his work in an attractive way, giving attention to interpretation, applications, and heuristic understanding; and he does this in excellent English. I think the society has made an excellent choice for this year’s prize.

## 7.2 受賞のことはば：「美しい定理を理解する心をめざして」

西山 陽一（統計数理研究所）

この度、名誉ある賞を受賞させて頂き光栄に思います。歴代の受賞者には「思いがけず受賞させて頂くことになり…」といった謙虚な文章を書かれる方が多いようですが、私を直接知る方はご存じのとおり、私は不謙虚で思ったことをストレートに発言するタイプなので、ここでも以下でも全て率直に正直に書きます。私がこの論文をJSSに投稿したのは、あわよくば小川賞を受賞できたら嬉しいなあと夢見たからです。目標にしていた小川賞を頂戴でき、最高に嬉しいです。

受賞対象論文は丸められたデータに対するDonskerの定理を証明したのですが、私が通常のDonskerの定理に出会ったのは大学4年に遡ります。池田信行先生のご指導のゼミで、4月にブラウン運動の定義を学んで、いきなり5月にBillingsley (1968)の本でDonskerの定理の勉強をしました。こう書くと同定理の美しさに惹かれて学問の道に入りましたといった美談が始まるのかと思われるかもしれませんが、出来の悪い私の場合にはそうではなく、同定理を見てもちっとも感動せず、証明もまるで理解できず、これを見て美しいと感じないのは自分に数学的センスがないからだと落ち込んだりしました。

関数族によって添字づけられた経験過程に対するDonskerの定理に出会ったのは、修士2年のころでした。阪大数理での月曜談話会で安芸重雄先生が、現代的経験過程のsymmetrization techniqueを応用して分布の対称性の検定問題を考察するというご講演をされたのを拝聴し、当時Nelson-Aalen推定量をマーク付き点過程に拡張する問題を考えていた私は、これだ！と直感しました。その問題は修士論文では解決できませんでした。統数研に就職してから始めた“Entropy Methods for Martingales”というプロジェクトの最初の例題として解決できました。そのプロジェク

ト自体はオランダ留学の締めくりに執筆した博士論文で中間報告し、現在も進行中です。なお、オランダ留学中はスーパーバイザーのRichard D. Gill教授が私の書く論文原稿を全て読んで下さり、常に情熱あふれる激励のコメントを頂きました。私はGill教授から博士号を頂戴したことを大きな誇りに思っています。

帰国後の私は、知る人ぞ知る大スランプに陥ったのですが、その間、辛抱強く暖かくご支援くださいました平野勝臣先生、尾形良彦先生、江口真透先生、吉田朋広先生をはじめとする皆様に深く感謝します。特に吉田先生からは、共同研究という名目で、事実上の再教育を賜りまして、なんと

か立ち直ることができました。最近では、美しいと感じるべき定理がちゃんと美しく見えることも多くなってきました。自分の証明する定理にも明るく元気のよいものがいくつか出てきました。受賞対象論文もそのひとつです。この場をお借りして、恩師の稲垣宣生先生に「いま研究がとても楽しいです」と胸を張ってご報告できます。修士入学の際、初めて稲垣先生のお部屋のドアをノックしたときの気持ちを忘れることなく、今後とも努力したいと思います。

**略 歴**：昭和44年兵庫県姫路市生まれ。大阪大学大学院基礎工学研究科博士前期課程修了。Ph.D. 統計数理研究所数理・推論研究系准教授。

## 8. 会員からの投稿記事

### 第一回のIMS Asia Pacific Rim Meeting報告

竹村 彰通 (東京大学)

6月28日から7月1日に韓国のソウル大学においておこなわれた、標記学会 (<http://ims-aprm.org/>) について報告いたします。以下の報告は、Prof. Byeong U. Parkからの報告の一部に、竹村が日本統計学会の部分を補足したものです。

第一回のIMS Asia Pacific Rim Meetingは、Byeong U. Parkが運営委員長を務め、Feifang HuとRunze Li 二人がプログラム委員長を務めました。IMS-APRMは2006年にIMSの前会長のJianqing Fanにより創設されました。

プログラムにはPeter Bickel (statistics) とMasatoshi Fukushima (probability) による二つの全体講義が含まれました。その他に17のdistinguished

lecture, 44の招待講演セッション, 29の一般講演セッション, 及び一つのポスターセッションがありました。35のポスター発表を含む、発表の総数は386でした。386の発表者の所属の内訳は、最多が米国の135, 次いで韓国の106でした。参加者は23カ国700名を越えました。

IMS-APRMは各国の統計学会からdistinguished lectureおよび招待講演セッションを提案する形でおこなわれ、日本統計学会からはdistinguished lecturerとして田中勝人会員を推薦しました。また、3個の招待講演セッションを組織しました。

なお第2回のIMS-APRMは2011年に日本で開催することとなりました。皆様のご協力をお願いいたします。

## 9. 2009年度統計関連学会連合大会報告

### 9.1 プログラム委員会報告

水田 正弘 (北海道大学)

#### [1] 概況・総括

2009年度統計関連学会連合大会は、応用統計学会、日本計算機統計学会、日本計量生物学会、日

本行動計量学会、日本統計学会、日本分類学会の共催で、2009年9月6日(日)から9日(水)まで同志社大学今出川キャンパスおよび京田辺キャンパスで開催されました。2つのキャンパスでの市民講演、チュートリアル、学術講演、さらには、京都に長く住む地元の先生をして「Deepな京都」

と言わしめた懇親会により、古都を堪能されたことと思います。

本大会は、実行委員会、運営委員会、プログラム委員会の適切な協調と適度な分離により準備・運営できました。今回から業務支援いただいた業者の熟練したサポートもあり、大きなトラブルもなく終了できたと思います。それにもまして、講演者、座長、参加者の皆様のおかげで学術的にも高いレベルの大会になったと思います。関係された皆様方に心から感謝いたします。

プログラム委員会では、業務をいくつかに分けて全員で分担いたしました。以下に、市民講演会、チュートリアルセッション、コンペティションセッション、統計分析・データ・教育ソフトウェアセッションの各担当責任者により、それぞれの担当についての報告をしてもらいました。別に掲載した運営委員会からの報告およびコンペティションセッションの受賞者のことと合わせて御高覧頂ければ幸いです。

(プログラム委員会委員長 水田正弘 北海道大学情報基盤センター)

## [2] 市民講演会

統計関連学会連合大会における社会貢献の一つとして、9月6日(日)16時～18時半に同志社大学クラーク記念館(今出川キャンパス)において市民講演会を開催しました。これは、統計学を少しでも身近に感じてもらい、一般社会に対して広く普及・浸透させることを目的に連合大会が主催して例年開催してきたものです。

今回は「学力調査と統計～全国学力・学習状況調査の現状と統計的側面からの検討」をテーマとしました。近年の学力低下に関する議論を端緒として、文部科学省では平成19年から毎年4月に「全国学力・学習状況調査」を実施し既に3回が終了しています。この調査は小学校6年生と中学校3年生の全員を対象とするもので「悉皆調査」と呼ばれています。当初から調査の設計や、得られたデータをどのように教育現場にフィードバックするか等、種々のフェーズに対して議論があり、

現在でも多くの国民が関心を持っている調査でもあります。

そこで本講演会では、この「全国学力・学習状況調査」を素材に統計的な側面から、学力調査の役割や課題、活用方法についての議論を深めてもらうことを目的に企画しました。学力調査にまつわる設計から調査実施、解析に至るまでの種々の作業について、最新の研究成果を以下の4名の識者に解り易く講演していただきました(敬称略)。

講演者：

- 1) 藤井宣彰(国立教育政策研究所教育課程研究センター研究開発部)  
「全国学力・学習状況調査の概要」
- 2) 盛永俊弘(京都府向日市立西ノ岡中学校)  
「全国学力・学習状況調査の意義と活用法」
- 3) 土屋隆裕(統計数理研究所)  
「全国学力・学習状況調査の分析と活用」
- 4) 安野史子(国立教育政策研究所教育課程研究センター基礎研究部)  
「大規模調査の今後の展望」

企画・司会：

林 篤裕(九州大学高等教育開発推進センター)

国の重要文化財でもあるクラーク記念館の重厚な雰囲気と歴史を感じながら、立ち見を含めて110名以上の聴衆が熱心に講演に聴き入りました。後半の全体討論でも、予定された時間を越えて最後まで本質を突いた質問と意見交換が続き、関心の高さを改めて認識すると共に、もう少し長めに時間を設定しておけば良かったというのは贅沢な反省点かもしれません。

このように盛会であったことから、当初の市民に対しての目的は達せられたと考えられますし、加えて、連合大会出席者には学力調査が統計の応用事例の一つとして興味深く捉えていただけたのではないかと感じております。当日の配付資料の内、ご了解いただけたものについては、Webに掲載しておりますので、ご興味がおありの方はご参照下さい。

(<http://www.jfssa.jp/taikai/2009/program.html>).

最後になりましたが、本講演会ではこの企画の準備段階から当日の会場設営・片付けに至るまで多くの方々にご協力をいただきました。ご講演者、参加者の方々を含めてこの場を借りて皆様方にお礼を申し上げます。この度はどうもありがとうございました。

(担当責任者 林 篤裕 九州大学高等教育開発推進センター)

### [3] チュートリアルセッション

今年度のチュートリアルセッションの開催に当たって、各学会選出のプログラム委員を通じてテーマを募ったが、特定のテーマの希望はなかったため、プログラム委員会のチュートリアル担当委員でテーマを検討した。その結果、計量生物学と経済関連の分野で1つずつテーマを設定することとなり、講師の先生方とも相談し、「ノンパラメトリック回帰入門」と「DSGEモデルとVARモデルの計量分析-MCMCのマクロ金融政策への応用」という2つのテーマでチュートリアルセッションを行うことになった。

これまでチュートリアルセッションは、2ないし3のテーマを設定した上で、バラレルで行ったり、時間をずらして複数のセッションに参加できるようにしたり、それらを組み合わせたりと、様々な試みが行われてきた。今回は、時間的な制約も考慮し、シンプルに2つのバラレルなセッションを設定し(いずれも13:00~15:45)、1つのテーマに集中して参加してもらえるようにした。

それぞれのセッションの概要は以下の通りである。

#### [テーマ1] ノンパラメトリック回帰入門

講師：竹澤邦夫(中央農業総合研究センター)

オーガナイザー：松井茂之(統計数理研究所)

線形回帰、平滑化スプライン、局所回帰、加法モデル、ヒストグラムの平滑化に関する初歩的な技法と陥りやすい間違い、さらには、Rパッケージ

ジを用いた解析での注意点について、丁寧かつ明快な解説がなされた。

#### [テーマ2] DSGEモデルとVARモデルの計量分析 -MCMCのマクロ金融政策への応用

講師：渡部敏明(一橋大学経済研究所)、藤原一平(日本銀行)

オーガナイザー：勝浦正樹(名城大学)

近年、各国の中央銀行などで金融政策の効果を測定するのによく利用されているDSGE(Dynamic Stochastic General Equilibrium)モデルについて、その経済学的な側面や利点について解説し、さらにMCMC(Markov chain Monte Carlo)を利用したモデルの推定について詳細な説明がなされた。モデルが登場した歴史的な背景や、MCMCについての一般的な基本事項なども含め、初心者にもわかりやすく説明がなされた。

セミナー当日の聴講者は、テーマ1が約140名、テーマ2が約50名であった(途中の入退室もあるため概数である)。この人数が多いか少ないかは評価の分かれるところであろうが、実行委員会に大きめの教室を用意していただいたため、参加者が資料などを広げても余裕をもって講演を聴くことができ、非常にありがたかった。実行委員会のご配慮に感謝したい。またいずれのテーマも配布資料が周到に準備されており、今後自分で深く研究しようとする場合の文献等も適切に示され、参加者の満足のいくものであったと思われる。

ただし、参加できるセッションが1つでよいのかといったチュートリアルセッションの構成や、テーマを数年間でどの分野からバランスよく選定するかなどは、今後の課題であるだろう。しかしながら、講師の先生方のわかりやすい丁寧な説明のおかげで、今年度のチュートリアルセッションは成功裏に終わったといえよう。講演を快く引き受けていただいた講師の方々に深く感謝する次第である。

[担当：足立浩平(大阪大学)、折笠秀樹(富山大学)、勝浦正樹(名城大学)、松井茂之(統計数理研究所)]

#### [4] コンペティションセッション

統計関連学会連合大会のコンペティション講演は今年で7回目を迎えました。対象者は、平成21年4月1日時点で満30歳未満のいわゆる若手研究者（大学院生、教員、社会人等を問わない）です。大会における連名講演の場合は、コンペティション対象者は実際に口頭発表した方としました。

コンペティション講演を申し込まれた方皆さんに大会当日に講演していただきました。審査方法は、昨年と同様に当日の口頭発表に対して、審査員およびコンペティションセッションの参加者の記名投票に基づき、総合評価で行いました。特別審査および一般審査での評価は、共に、A、B、Cの3段階評価（A：受賞に値する、B：受賞としてもよい、C：受賞に値しない）を用いました。なお、講演者ならびに共著者は自身への投票はできないことにしました。

評価は、研究内容のみならず、発表者各自が工夫をして、うまく内容を伝えられたか、質問に的確に答えられたかという発表の仕方も含め、全体としての素晴らしいプレゼンテーションになっているかを評価の対象としました。

コンペティションセッションは9月7日（月）の午前、午後（1）、午後（2）に夢告館のC会場で行われました。講演数は15件でした。特別審査と一般審査のそれぞれに対して、Aを2ポイント、Bを1ポイント、Cを0ポイントとし、講演者ごとに有効投票数で平均点を算出し、総合評価をしました。選考は、これらの点数に基づき、プログラム委員会で行いました。最優秀報告賞は1名、優秀報告賞は4名に授与することにしました。2009年度統計関連学会連合大会の最優秀報告賞は、林賢一さんに、優秀報告賞は、大東健太郎さん、熊坂夏彦さん、首藤信通さん、そして、藤井陽介さんに決定いたしました（五十音順）。大会中9月8日（火）に懇親会（The Garden Oriental Kyoto）において、受賞者を発表して表彰し、それぞれ賞状と副賞が統計関連学会連合大会理事長より贈呈されました。

コンペティション講演をされました全員が、研

究内容や発表の仕方等、素晴らしいプレゼンテーションでありました。昨年のコンペティション報告にも書きましたが、連合大会のような大変権威ある大きな学会でコンペティション講演することは、受賞する、しないにかかわらず、若手の皆さんにとって大変に有益であり、今後の研究活動への大きな励みになると思います。若手によるコンペティション講演は、毎年、大変多くの方が関心を持って注目しております。多くの方に自分（自分の研究と自分自身）を知ってもらう、またとない絶好のチャンスであります。

権威あるジャーナルへ論文を掲載することは重要なことでありますが、それとともに、若手の皆さんにとって、多くの方から一躍注目される立派なコンペティション発表をすることも大変に重要なことであります。今回コンペティション講演をされました方の中から、将来世界のトップクラスの統計研究者が誕生するものと確信しております。これからも若手の皆さんには、是非コンペティション講演を考えていただきたいと思います。

最後に、コンペティション講演を申し込まれました若手研究者の皆様、座長の先生方、審査に参加されました皆様、そして、コンペティション講演に関する準備等いろいろとご尽力いただきました大会運営関係者の方々へ心よりお礼申し上げます。

（担当責任者 瀬尾隆 東京理科大学理学部）

\*「受賞者のことば」は別欄に掲載されています。

#### [5] 統計分析・データ・教育ソフトウェアセッション報告

2009年度統計関連学会連合大会のセッションの一つとして、「統計分析・データ・教育ソフトウェアセッション」（座長：成蹊大経済・新村秀一、東洋大経済・渡辺美智子、オーガナイザー：東洋大経済・渡辺美智子、長崎大アドミッションセンター・吉村宰）が、2009年9月8日（火）、午前10：00～12：00、午後13：10～15：10に、2つのセッションに分かれて、同志社大学京田辺キャンパス夢告館MK203（C会場）で開催されました。

統計分析・データ・教育ソフトウェアに関する多くの関連企業や政府関係機関のご協力があり、合計13件の講演となりました。プログラムは次の通りです。

1. JMP 8を用いたビジュアル的な分布のあてはめ、比較  
増川直裕\* (SAS Institute Japan (株) JMPジャパン事業部)
2. S-PLUSの最新機能紹介－オンラインライブ러리などの拡張機能 その他  
田澤 司\* ((株) 数理システム)
3. 数理システムのマイニングソリューション－大学における導入事例ご紹介  
中園美香\* ((株) 数理システム)
4. モンテカルロシミュレーションを利用した事業リスク評価の定量化  
－リスク評価ツール Crystal Ballのご紹介－  
構造計画研究所\*
5. 経済・経営・社会学系の実証分析を支える分散構造モデル分析ソフトウェアの紹介  
－グラフィカルモデリング分析機能で因果モデルの構築へ－  
富田真理子\* ((株) 日本科学技術研修所数理事業部)
6. 数理計画法でできる問題解決の新世界  
－大規模データに基づく高速パターン認識－  
新村 秀一\* (成蹊大経済), 市川 均 (LINDO Japan)
7. Excelでできる統計解析－生存分析とクラスタ分析の実例のご紹介  
日本ニューメリカルアルゴリズムズグループ (株)\*
8. EXCELアドイン潜在クラス分析を使った Finite Mixture Modelの分析  
－Statistical Innovations 「Latent GOLD」対応－  
山口和範\* (立教大経営), 中川一成 ((株) エスミ)
9. インターネットで統計がつながる  
～政府統計の総合窓口 (e-Stat) のご紹介～  
深野淳一\* (統計センター)

10. 企業財務・証券データからマクロ・産業統計、POSデータまで先進の研究を生み出すヒントに－日経の経済データベース・サービスNEEDSのご紹介

日本経済新聞デジタルメディアNEEDS事業本部\*

11. メジャーリーグの数理科学：Curve Ball－the motivation for writing and some of the key findings

Jim Albert\* (Bowling Green State University), 極東書店

[お詫び] プログラム中には、極東書店様の標記が抜けておりました。

極東書店様にはこの場を借りてお詫び致します。

12. 統計教育のためのソフトウェア：Fathom Dynamic Data Software, Tinkerplots Dynamic Data Explorationの設計思想と機能

William Finzer\* (Key Curriculum Press)

13. JST理科ねっとわーくで配信する統計教育支援教材～科学の道具箱～

酒折文武\* (中央大理工), 田村義保 (統計数理研究所データ科学研究系), 竹内光悦 (実践女子大人間社会)

本セッションにおいては、データ提供の環境、統計分析ソフトウェア、統計教育ソフトウェア、書籍に関する最新の内容のご講演をいただき、非常に有意義な情報交換の場となりました。ここに、ご協力いただいた企業および政府関係機関、研究者の方々に御礼申し上げます。

(担当責任者 渡辺美智子 東洋大学経済学部)

## 9.2 運営委員会報告

橋本 紀子 (関西大学)

2009年度の統計関連学会連合大会が、9月6日(日)から9日(水)の4日間、同志社大学において開催されました。連合大会も回を重ねて8回目を迎え、本年より6学会の共催となりました。大会参加者数も招待講演者を含め約830名と大変盛況で、4年連続で800名を超えました。また、本年の特色は、各学会の特色を活かした、国際色

豊かな企画セッションが多く開催されたことです(16セッション, 58件)。一般講演やコンペティション講演, デモセッションに於ける発表を含めると, 総発表数は325となり, 9会場を用いての開催となりました。

運営委員会の仕事は大きく3つの業務 - (1) 受付業務を含む会計, (2) チュートリアル資料集や報告集の作成, (3) 広告の受付等の業務 - からなっています。順にご報告申し上げます。

今年度も事前参加申込をより促進させるため, 当日参加に比してリーズナブルな事前参加費の設定, 1ヶ月を超える申込期間の確保, 万一不参加の場合でも冊子を郵送するなどの配慮を行いました。また, 昨年までは申込みシステムで何かとトラブルが生じ事前申込者の方にご迷惑をおかけすることがございましたが, 本年より業者の変更を行い, 万全のシステム準備を心がけました。その結果, 参加者の7割強の方に事前申込みシステムを利用いただくことができました一方, 本年のトラブル, クレーム件数はゼロでございました。事前参加申込をご利用いただけますと, 大会当日の受付がスムーズになり, 参加者の皆様のご負担を減らせることに加え, 会場での現金管理が簡便となり, 運営委員会としましても安心して会場運営を行うことができます。来年度以降も, より多くの皆様が事前参加申込を利用くださいますよう, お願い申し上げます。

報告集では, 新業者のシステム設計に基づき, プログラム委員会が要旨のweb公開に踏み切られましたため, CD-ROMの作成を行いませんでした。また, 要旨の投稿後, 印刷されますイメージをオンラインで確認できるシステムを準備し, 発表者ご自身に文字化け等の問題が生じていないかご確認いただける形といたしました。これにより, より精度の高い印刷結果を期することができ, また校正業務を大幅に効率化することができました。なお, 昨年に引き続き, 著者索引の作成を行いました。

本年度も大会ホームページ上のバナー広告, 講演報告集の広告, 展示スペースへの出展, デモセ

ッションでの発表など, さまざまな広告を募集いたしました。100年に一度とさえ言われます大変な経済状況にも関わらず, 多くの関連企業や研究機関のご協力を得ることができましたことを, この場をお借りしまして心より御礼申し上げます。安定した大会運営のためには, 広告収入の維持は不可欠な条件となっております。今後とも関連企業・諸機関の皆様のお力添えを心よりお願い申し上げます。

### 9.3 コンペティション受賞者のことば

#### [1] 最優秀報告賞

林 賢一 (大阪大学大学院基礎工学研究科)

統計関連学会連合大会において, 栄えある最優秀報告賞を賜り, 大変嬉しく思っております。この結果は, 指導教官である狩野裕先生の日々のご指導や, 統計数理研究所の江口真透先生の貴重なご助言, 研究室メンバーの有形無形のサポートの賜物であり, 感謝の念に堪えません。また, コンペティションを企画・運営された皆様と審査された皆様に厚く御礼申し上げます。

今回の報告では, 非対称ミスラベルデータという, 生命科学や社会科学において起こり得る状況に対処するためのブースティングを提案いたしました。このブースティングに用いるロス関数は, 先行研究で言及されている二つの望ましい性質を併せもち, 数値実験においてもその有用性が確認されました。報告後, 沢山の方々からご指摘・コメントを頂き, 今後の研究の様々な方向性を模索する助けとなりました。また, 理論面でも応用面でも高い関心をもたれていると実感し, 一層の励みにもなりました。

学会やシンポジウムにおける発表では, 発話の聴覚情報とスライドの視覚情報があるため, それらが混線しないように切り分け, 集中して頂く箇所を常に一点に絞ることに腐心しました(本当の理想は映画や演劇のように, 視聴覚情報が渾然一体となったものなのですが)。実は, 国内の学会において講演者として参加するのが一年半ぶりだ

ということもあり、勝手に思い出すのに時間がかかり、大変緊張している中で発表いたしました。そのような状況でも有難い評価を頂いたのは、研究の最先端を切り拓いておられる先生方や、志を同じくする学生の皆様との日々の刺激的なゼミ・ディスカッションで培われた「人に伝えるための話し方」が基礎体力として身に染みついているからだと思ひ、私を取り巻く方々へ感謝せずにはいられません。

当然ではありますが、研究は未だ発展途上で、解決せねばならない問題も山積みです。積まれた山の底に、掘り当てねばならない金鉱があることも自覚しています。少しでも統計科学の発展に貢献できるよう、またコンペティションセッションで頂いた評価が「ミスラベルであった」とご期待に背くことのないよう、一層の研鑽を重ね、研究の道に邁進していきたいと思っております。そして皆様におかれましては、今後も御指導御鞭撻を賜りますよう、よろしくお願い申し上げます。

ありがとうございました。

## [2] 優秀報告賞

大東 健太郎（農業環境技術研究所）

このたび統計関連学会連合大会コンペティション講演において優秀報告賞をいただきましたこと、大変光栄に思います。まず、コンペティション講演を企画・運営して下さった先生方、そして審査に参加していただきました皆様に厚く御礼申し上げます。また今回の研究に際し、播種から開花調査まで、多大なご協力をいただきました、農業環境技術研究所の研究支援室の皆様にも深く感謝いたします。

本大会では、ダイズとツルマメをモデルとした開花期のズレを利用した時間的隔離のための指標についての報告をさせていただきました。二つの分布の類似度というのは古くから考えられてきたテーマですが、開花期の重複程度を表す指標としては用いられてきませんでした。今回モデルとしました、ダイズとツルマメは非常に交雑率が低いため、開花期の重複程度と交雑率の関係を

しっかりと検証するには不十分なデータでした。今後はイネやトウモロコシなどを用いて、研究を続けていきたいと考えております。

今回、統計関連学会連合大会へは初めて参加したのですが、自分の研究分野において非常に役に立つ手法を数多く知ることができ、本当に有意義なものとなりました。もともとは新型インフルエンザで中止になりました計量生物学会での発表を予定していた内容でした。中止になりました計量生物学会、応用統計学会の事務局の皆様には本当に大変なご苦勞があったと思いますが、私個人と致しましては、このような賞をいただくことができ、人生塞翁が馬と申しますが、幸運なことだったと感じております。最後に内輪ごとになりますが、日頃よりさまざまな話題について相談に応じてくださる三輪領域長をはじめ、魅力的な現実の問題を提供して下さる共同研究者の皆さまに深く感謝しております。これからもどうぞよろしくお願いいたします。

## [3] 優秀報告賞

熊坂 夏彦

（理化学研究所ゲノム医科学研究センター）

20世紀の初頭にメンデルの法則が再発見されてから50年後の1953年、ワトソン・クリックによってDNAの二重螺旋構造が明らかになりました。それから50年後の2003年にはヒトゲノムの全参照配列が解読され、われわれのDNAは約30億塩基対からなることが報告されました。

これからの50年は、今まで誰も経験したことがないような膨大で複雑なデータとの戦いになるでしょう。ここ数年で、すでに数十万から百万におよぶ一塩基多型（SNP）が安価にしかも高速に取得されるようになりました。また次世代シーケンサの登場により、今後5、6年もすれば、ヒトゲノムの全配列が個人単位でわずか1,000ドルで決定できるようになると予想されています。かつて学問の袂を分かった医学、情報学、数学、生物学、統計学、物理学といった現在の諸科学分野が、今後ヒトゲノム・データを中心にまた一つの科学

として融合していくことでしょう。その時、数理(統計)モデルが、データとその背後に存在する生物・遺伝現象を結ぶ一つのインタフェースとして、中心的な役割を果たすことは言うまでもありません。

今後ますます統計学の需要が増していくなか、このたび統計関連学会連合大会という大変権威ある学会におきまして、優秀報告賞を授かり大変喜ばしく思っております。これを励みに、既に始まっている次の50年に向けて、これからも日々研鑽を積んでいく所存です。あらためまして大会関係者の皆様に深く御礼申し上げますとともに、今後とも一層のご指導ご鞭撻のほどよろしく願い申し上げます。

#### [4] 優秀報告賞

首藤 信通(東京理科大学大学院理学研究科)

この度の統計関連学会連合大会において、身に余る光栄な賞を頂きましたこと、誠に感謝申し上げます。特に企画、運営された先生方、学生である私の発表に耳を傾けて下さった先生方、日頃より私に多くの研究機会と懇切丁寧なご指導を下さっている瀬尾隆先生、私の研究生活を陰で支えて下さっているすべての方々には深く感謝申し上げます。特に兵頭昌さん(東京理科大学大学院・理学研究科)とは本報告に関わるたくさんの議論をさせて頂きました。また、本報告は、昨年度の連合大会で藤越康祝先生からご助言頂いた研究課題の1つでした。1年後の本連合大会において、この結果によって優秀報告賞を頂いたことを大変うれしく思うとともに、藤越康祝先生に厚く御礼申し上げます。

本報告では、先行研究で与えられている線形判別法における誤判別確率に対する漸近近似の1つに対し、標本ベクトルに欠測値を含む場合への拡張を行いました。判別分析において誤判別確率に関する議論は大変重要な議論であり、この重要かつ未知である確率に対する従来の漸近近似の多くは完全データの下で構成された漸近近似でした。発表に関しては、私は普段から弁が立つ方ではな

いので、上手にお伝えしようとするのではなく、研究課題が多岐にわたる先生方に対して、本報告の動機と設定について丁寧かつ確実に伝えることを心掛けました。

本報告は最尤推定量を用いた線形判別法における1つの結果でありましたが、本来データの状況に応じて、より正確な判別がなされる推定法や判別法を使い分けることが理想的であり、これらに応じた本報告と同様の結果が必要であると考えております。何分器用ではないもので時間はかかるかもしれませんが、葛藤や失敗を繰り返しながらも、この研究課題も含めて残されるさまざまな問題に対し真摯に取り組むことで、微力ながら統計科学の発展に寄与できれば幸いです。今後はこの度の受賞に驕らず、これまで以上に努力をいとわず邁進する所存ですので、今後とも何卒宜しく願いいたします。

#### [5] 優秀報告賞

藤井 陽介(統計数理研究所)

この度は統計関連学会連合大会において優秀報告賞をいただきまして、驚きとともに大変光栄に思っております。日ごろから私の研究に対する助言をいただいております統計数理研究所の藤田利治先生、同逸見昌之先生、そして私の研究に対してコメントをくださった多くの方々に深く感謝致します。また、本コンペティションの企画・運営に携われた方々、ならびに座長の先生方、そして審査して下さった方々に感謝致します。

発表の演題は、「単剤・併用を伴う臨床試験の重み付け傾向スコア法による交互作用の評価」でありました。薬剤の有効性・安全性評価は通常、単剤試験・併用試験それぞれ単独で行われますが、単剤・併用の評価結果の相違、つまり単剤・併用と被験薬・対照薬の交互作用も実際的な関心事となります。しかし、このようなケースで交互作用を評価するときの問題点は、試験へ登録された後の薬剤の割付はランダム化されていますが、単剤・併用各試験への患者の登録はランダム化されておらず試験登録の選択性が懸念されることで

す。本研究ではこの選択性を調整するための傾向スコアによる重み付け推定量を提案致しました。

現在の研究の対象は上述のように臨床試験であります。この方法論はさまざまな分野へ応用が

できるものだと考えております。一方で、本研究には解決しなければならない課題が数多くあります。今回の受賞を今後の私の研究活動の糧にし、一歩ずつ研究を進めてまいります。

## 10. 2010年度統計関連学会連合大会について

2010年度統計関連学会連合大会は早稲田大学（早稲田キャンパス）において、2010年9月5日（日）から8日（水）の間、開催されることが決

まっております。詳細については、次号に関連記事を記載する予定です。

## 11. 第77回日本統計学会総会報告

日 時：2009年9月8日（火）12：10～13：10

場 所：同志社大学文化情報学部

京田辺キャンパス恵道館1階KD106教室

岩崎学理事長の司会進行により開会された。

### 1. 会長挨拶：

美添泰人会長より挨拶がなされた。

### 2. 議長選出：

議長として椿広計会員が選出された。

### 3. 2008年度事業報告・同決算報告、および会計 監査報告：

倉田博史庶務担当理事より、資料（付表）に基づいて事業報告案および決算報告案の説明があり、引き続き高橋一監事より会計報告がなされ、質疑応答の上承認された。

### 4. 評議会からの報告：

美添泰人会長より、2008・2009年度第3回評議員会（9月6日開催）での議事に関して報告された。そのうち、会費未納会員への対応方法などについては、やや詳しく報告された。

### 5. 2009年度事業計画・同予算：

山下智志庶務担当理事より、資料（付表）にもとづいて事業計画案・同予算案の説明がなされ、質疑応答の上承認された。

### 6. 第78回大会について：

美添泰人会長より、2010年度第78回大会を早稲

田大学（早稲田キャンパス）において、2010年9月5日から8日の間で、統計関連学会連合大会として例年通り4日間の会期で開催する予定であることが報告された。

### 7. 名誉会員の推薦について：

評議員会から北川源四郎会員の名誉会員への推薦がなされたことが美添泰人会長より報告され、北川会員を名誉会員とすることが承認された。

### 8. その他：

岩崎学理事長より、理事などの交代について下記の報告があった。選挙管理委員を中西寛子会員から櫻井尚子会員に交代する。福地純一郎広報担当理事の退任にともない、根本二郎会員が後任として、勝浦正樹大会・プログラム担当理事の退任にともない、星野伸明会員が後任として、橋本紀子大会・運営担当理事の退任にともない、古澄英男会員が後任として、倉田博史庶務・会計担当理事の退任にともない中西寛子会員が後任として就任する。

以上を持って総会は終了し、引き続き第14回日本統計学会賞、第5回統計活動賞、第5回統計教育賞、第3回研究業績賞、第2回出版賞、第23回日本統計学会小川研究奨励賞の授賞式が行われた。

## 2008 年度事業報告

(2008. 4. 1～2009. 3. 31)

1. 日本統計学会第 76 回大会の開催  
2008 年 9 月 7 日～10 日の 4 日間にわたり、慶応義塾大学失上キャンパスにおいて統計関連学会連合大会の一環として開催した。
2. 第 76 回大会講演報告集の発行  
連合大会の講演報告集として発行した。
3. 会誌の発行  
欧文誌 3 号[Vol. 38 No. 1-2 (6 月), No. 3(12 月)], 和文誌 2 号[第 38 巻シリーズ J 第 1 号(9 月), 第 2 号(3 月)]を発行した。
4. 会報の発行  
No. 135 (4 月), No. 136 (7 月), No. 137 (10 月), No. 138 (1 月) を発行した。
5. 賞の授与  
第 13 回日本統計学会賞, 第 4 回日本統計学会統計活動賞, 第 4 回日本統計学会統計教育賞,  
第 2 回日本統計学会研究業績賞, 第 22 回日本統計学会小川研究奨励賞を授与した。
6. 研究部会の活動  
研究部会が活動終了となった。  
「マーケティングへの統計科学アプローチ」(照井伸彦主査: 2006 年 12 月発足, 2008 年 11 月終了)
7. 第 3 回春季集会の開催  
2009 年 3 月 6 日に統計数理研究所において開催した。
8. 研究分科会の活動  
次の 2 分科会が活動した。  
「統計教育部会」(渡辺美智子主査: 2006 年 12 月発足, 2010 年 11 月終了予定)  
「計量経済・計量ファイナンス分科会」(谷崎久志主査: 2006 年 12 月発足, 2010 年 11 月終了予定)
9. 各種委員会の活動  
評議員会, 理事会, その他の各種委員会を開催した。
10. その他  
(i) 国際交流を推進した。  
(ii) インターネット経由での情報発信を促進し、英文のホームページを充実させた。  
(iii) 統計関連学会連合の事業推進に協力した。  
(iv) 入会者拡大の方策を検討した。  
(v) 会誌購読拡大の方針を検討した。  
(vi) 会誌のバーチャルパンを電子ジャーナル化するための準備を進めた。  
(vii) 評議員選挙, 会長選挙を実施した。

## 2008 年度決算

(2009 年 3 月 31 日現在)  
(単位: 円)

### (i) 貸借対照表

科目	借 方		貸 方	
	期首	期末	期首	期末
固定資産	180,471	180,471	学会自己資金	180,471
流動資産	13,909,894	13,179,959	学会活動積立金	5,000,000
現金	84,951	98,757	役員旅費補助積立金	200,000
振替口座	152,242	341,489	名簿作成積立金	300,000
預貯金	13,672,701	12,739,713	O A 機器積立金	1,100,000
			未払い金	0
計	14,090,365	13,360,430	繰越金	6,048,629
			計	14,090,365

### (ii) 収入

科目	細目	予算額 1) (単位: 円)	決算額 (単位: 円)
今期繰入金		7,310,000	7,309,894
未払い金繰り入れ		0	0
学会活動積立金取崩		500,000	1,500,000
O A 機器積立金取崩		0	0
役員旅費補助取崩		100,000	0
名簿作成積立金取崩		0	0
会費収入			
	名誉会員・正会員	11,240,000	11,041,000
	学生会員	10,000,000	9,997,000
	遡及請求分	240,000	206,000
		1,000,000	838,000
賛助法人費		1,480,000	1,480,000
団体会員費		160,000	160,000
科学研究費補助金		900,000	900,000
「研究成果公開促進費学術定期刊行物」			
雑収入			
	会誌購読料 2)	1,820,000	1,753,066
	利子収入	790,000	811,975
	広告収入	30,000	29,451
	その他 3)	1,000,000	775,000
		0	136,640
	計	23,510,000	24,143,960

2008年度決算 注

- 1) 予算額は千円未満四捨五入で記載。貸借対照表参照。
- 2) 定期購読国内販売およびバックナンバー売上。
- 3) 出版者著作権協議会・科学技術振興機構などからの入金。

会計監査報告書

2009年8月6日

日本統計学会会則第22条に基づき、2008年4月1日より2009年3月31日までの会計経理を監査した結果、決算書の通り相違ないことを認めます。

監事

前橋 一  
小暮 厚之

(iii) 支出

科目	細目	予算額 (単位円)	決算額 (単位円)
印刷費	会誌(J37-2)	12,512,000	12,169,826
	会誌(38-1~3,J38-1)	1,352,000	1,351,588
	未払い金 (J38-2)	9,500,000	8,104,899
	会報 (135号~138号)	0	1,570,460
	名簿印刷費	1,000,000	768,510
	その他	0	0
大会開催費		660,000	374,369
	春季集会開催費	240,000	119,279
	総親会	200,000	101,279
		40,000	18,000
研究部会費		300,000	100,000
研究分科会		100,000	40,000
常学會運営会合費		410,000	172,958
	評議員会	110,000	59,409
	特別委員会	40,000	20,000
	統計教育委員会	20,000	0
	会誌編集委員会	40,000	0
	理事會	200,000	93,549
	その他	0	0
経費		1,230,000	469,330
	一般事務人件費	650,000	4,350
	校正編集事務人件費	120,000	311,200
	発送事務人件費	250,000	105,000
	事務用品	100,000	35,022
	事務室借料	100,000	0
	その他	10,000	13,758
学會事務業務委託費		2,340,000	2,340,000
通信・郵送料		2,921,000	2,051,285
	会誌 (J37-2)	161,000	160,860
	会誌(38-1~3,J38-1)	840,000	594,335
	未払い金 (J38-2)	0	160,870
	会報 (135号~138号)	720,000	461,600
	名簿送料	0	0
	その他通信・郵送料	1,200,000	673,620
役員旅費補助		100,000	88,560
各種分担金		192,000	174,753
	日本経済学会連合	35,000	35,000
	ISI	67,000	49,753
	権断費連合	50,000	50,000
	統計関連学会連合分担金	40,000	40,000
ネットワーク維持費		62,000	12,075
国際交流促進費		100,000	0
名簿作成種立金		300,000	300,000
予備費		2,703,000	57,265
繰越金			6,048,629
計			24,143,960

## 2009年度事業計画

(2009.4.1~2010.3.31)

1. 日本統計学会第77回大会の開催  
2009年9月6日~9日の4日間[わたり, 同志社大学京田辺キャンパス、今出川キャンパス]において開催する。今回も統計関連学会連合大会の一環として開催する。
2. 第77回大会講演報告集の発行  
連合大会の講演報告集に含まれる。
3. 会誌の発行  
欧文誌2号[Vol.39 No.1(6月), No.2(12月)], 和文誌2号[第39巻シリーズJ第1号(9月), 第2号(3月)]を発行する。
4. 会報の発行  
No.139(4月), No.140(7月), No.141(10月), No.142(1月)を発行する。
5. 賞の授与  
第14回日本統計学会賞, 第5回日本統計学会統計活動賞, 第5回日本統計学会統計教育賞, 第3回日本統計学会研究業績賞, 第2回日本統計学会出版賞, 第23回日本統計学会小川研究奨励賞を授与する。
6. 研究部会の活動  
2009年12月に活動を開始する部会を募集する。
7. 春季集会の開催
8. 研究分科会の活動  
「統計教育分科会」(藤井良宣主査:2006年12月発足,2010年11月終了予定)  
「計量経済・計量ファイナンス分科会」(国友直人主査:2006年12月発足,2010年11月終了予定)  
「スポーツ統計分科会」(田村義保主査:2009年6月発足,2013年5月終了予定)  
「金融の計量リスク管理分科会」(三浦良造主査:2009年9月発足,2013年8月終了予定)  
新規に活動を開始する分科会を随時募集する。
9. 各種委員会の活動  
評議員会, 理事会, その他の各種委員会を開催する。
10. その他
  - (i) 国際交流を推進する。
  - (ii) インターネット経由での情報発信を促進する。英文のホームページを充実させる。
  - (iii) 統計関連学会連合の事業推進に協力する。
  - (iv) 入会者拡大の方策を検討・実施する。
  - (v) 会誌購読拡大の方針を検討・実施する。
  - (vi) 学会誌のバックナンバーの電子ジャーナル化を進める。
  - (vii) 会員名簿を作成する。



2009年度予算

(2009年4月1日現在)  
(単位 円)

(i) 貸借対照表

借 目	方 期		貸 目		方 期	首
	目	末	目	末		
固定資産	180,471	180,471	学会自己資金	180,471	首	180,471
流動資産	13,179,959	13,179,959	学会活動積立金	3,500,000	末	3,500,000
現金	98,757	98,757	役員旅費補助積立金	200,000	末	200,000
振替口座	341,489	341,489	名簿作成積立金	600,000	末	600,000
預貯金	12,739,713	12,739,713	O A機器積立金	1,100,000	末	1,100,000
			未払い金	1,731,330	末	1,731,330
計	13,360,430	13,360,430	繰越金	6,048,629	末	6,048,629
			計	13,360,430	末	13,360,430

(ii) 収入 (単位 千円)

科 目	目		細 目		目	計
	目	末	目	末		
今 期	6,048	6,048				6,048
繰入金	180	180				180
学会自己資金取崩	0	0				0
学会活動積立取崩	1,100	1,100				1,100
O A機器積立取崩	200	200				200
役員旅費補助取崩	600	600				600
名簿作成積立取崩	11,000	11,000				11,000
会 費 取 入			名誉会員・正会員	10,000		10,000
			学生会員	200		200
			週及講求分	800		800
費助法人費	1,480	1,480				1,480
団体会員費	160	160				160
科学研究費補助金	800	800				800
「研究成果公開促進費学術定期刊行物」						
雑 収 入	1,840	1,840	会誌購読料	810		810
			利子収入	30		30
			広告収入	1,000		1,000
計	23,408	23,408				23,408

(2009年度予算 注)

- 1) 固定資産として計上しているPCの除去に伴う処理
- 2) O A機器積立金、役員旅費積立金については全額取り崩し繰越金に組み入れる。
- 3) 名簿の発行を予定しているため全額取り崩す。

(iii) 支出 (単位 千円)

科 目	目		細 目		目	計
	目	末	目	末		
印刷費	11,560	11,560	会誌 (39巻 1,2,11,12号)	9,500		9,500
			会報 (139-142号)	800		800
			名簿印刷費	600		600
			その他	660		660
大会開催費	240	240	春季集会開催費	200		200
			各営業経費	40		40
研究部会費	300	300				300
研究分科会費	100	100				100
学会運営会合費	410	410	評議員会	110		110
			特別委員会	40		40
			統計教育委員会	20		20
			会誌編集委員会	40		40
			理事會	200		200
事務費	1,230	1,230	一般事務人件費	650		650
			校正編集事務人件費	120		120
			発送事務人件費	250		250
			事務用品	100		100
			事務室借料	100		100
			その他	10		10
学会事務業務委託費	2,340	2,340				2,340
通信・郵送料	2,921	2,921	会誌送料	840		840
			会誌送料未払い分 (38巻12号)	161		161
			会報送料	720		720
			名簿送料	650		650
			その他通信・郵送料	550		550
役員旅費補助	100	100				100
各種分担金	192	192	日本経済学会連合	35		35
			I S I	67		67
			横断型連合	50		50
			統計関連学会連合	40		40
ネットワーク維持費	15	15				15
国際交流促進費	100	100				100
名簿作成積立金	300	300				300
固定資産除去費	180	180				180
予備費 (次期繰越金)	3,420	3,420				3,420
計	23,408	23,408				23,408

(2009年度予算 注 続き)

- 4) 会誌と会報などの発送用封筒や入会の手紙の印刷など。
- 5) 学会五員 (統計学会賞、研究業績賞、統計活動賞、出版賞)、小川賞の懇親会招待分。
- 6) 事務員の交通費。
- 7) ドメイン使用料、学会サーバー委託費。

## 12. 理事会議事録

### 2008・2009年度 第4回理事会議事録案

日 時：7月11日（土）12：00～14：15

場 所：統計数理研究所 会議室（2F，所長室前）

出席者：美添泰人会長，岩崎学理事長，谷口正信（会誌編集・欧文），渡部敏明（会誌編集・和文），内田雅之（広報・HP），福地純一郎（広報・会報），久保田貴文（広報・ウェブ），前園宣彦（渉外・海外），田村義保（渉外・プロジェクト研究），稲葉由之（大会企画），勝浦正樹（大会企画），橋本紀子（大会・運営），倉田博史（庶務会計），山下智志（庶務会計），各務和彦（庶務会計）（以上15名，カッコ内は役割分担）

#### 報告事項：

##### <議題1>会長からの報告

美添会長より，理研の数理科学研究室より日本統計学会へ連携の申請があったこと，3月7日に青山学院大学で開催される春季大会の進捗状況，60周年基金の使用方法について検討中であることが報告された。また，本年度の統計学会賞，統計活動賞，統計教育賞，研究業績賞の推薦状況について報告があった。

##### <議題2>理事長からの報告

岩崎理事長より，（1）文部科学大臣賞等の各賞の推薦が順調に進んでいることが報告された。

##### <議題3>各理事からの報告

[欧文誌]

谷口担当理事より，Vol.39，No.1の進捗状況，および小川賞候補者が決定したことが報告された。

[広報]

福地会報担当理事より，会報140号の進捗状況が報告された。

[渉外（海外）]

前園担当理事より，連合大会の国際セッションの準備が順調に進んでいることが報告された。

[渉外（プロジェクト）]

田村担当理事より，JSTの理数系教育の統計教育に採択されたことが報告された。

[大会プログラム]

稲葉担当理事より，資料に基づいて第3回プログラム委員会とその後の計画が報告された。

[大会事務局]

橋本担当理事より，連合大会参加には事前受付の利用を呼び掛けるよう申請があった。

##### <議題4>協賛申請の承認報告

倉田理事より，資料に基づき2件の協賛申請が承認された。

#### 審議事項：

##### <議題1>2008年度決算案，事業報告について

倉田理事より，資料に基づいて2008年度決算案，事業報告について説明があり，承認された。

##### <議題2>2009年度予算案，事業計画について

山下理事より，資料に基づいて2009年度予算案，事業計画について説明があり，若干の修正の上承認された。

##### <議題3>名簿作成について

山下理事より，名簿作成の進捗状況が報告された。

##### <議題4>入退会者承認

倉田理事より，回収資料に基づき入退会希望者の説明があり，1名の入会拒否と，他の入会及び退会が承認された。

##### <議題5>今後の会務日程

次回理事会は11/14（土）に開催することが決められた。

##### <議題6>名誉会員の推薦

岩崎理事長より北川源四郎前会長の名誉会員への推薦を評議員会の議題とすることが提案され，了承された。

なお，倉田，福地，勝浦，橋本，清水の各理事の任期は2009年9月までであり，今回の理事会が

最後の理事会となることから、美添会長及び岩崎

理事長よりねぎらいの言葉があった。

### 13. 研究部会新設公募

統計学の研究活動を助成するため、日本統計学会が1954年に研究部会制度を設けて以来、これまでに多くの研究部会が誕生し、統計学の発展に寄与して参りました。この制度は、公募制をとり、原則として年1ないし2件が評議員会の承認を得て発足します。継続期間は2年間、助成額は1部会につき年間10万円で、部会設置期間終了時には、会員への研究成果の公表と評議員会への事務報告が義務付けられています。また、研究会の開催を本学会のホームページに掲載することになっています。

今年も研究部会を公募いたしますので、ふるってご応募ください。

締切日：2009年11月11日

応募先：

〒101-0051 東京都千代田区神田神保町3-6  
能楽書林ビル5F

財団法人統計情報研究開発センター内  
日本統計学会事務局

Tel & Fax：03-3234-7738

E-mail：shom@jss.gr.jp

応募書類の書式などは応募先までお問い合わせください。採否は、11月に開催予定の評議員会にて審議の上、決定いたします。

なお、研究分科会（設置期間4年間）については随時募集しております。こちらにも積極的にご応募ください。研究分科会の趣旨等については会員名簿（2007年12月）の記載または学会ホームページをご参照ください。

### 14. 新刊紹介

本学会員からの投稿による新刊図書の紹介記事を掲載します。

●杉山将著『統計的機械学習：生成モデルに基づくパターン認識』オーム社、2009年9月、2940円

本書は理工系大学の学部生に向けた統計的機械学習の入門書である。理論とアルゴリズムだけでなく、実際にパターン認識をどのように行うのかをOctaveとよばれる数値計算ソフトを使って説明する。

●中村永友著『Rで学ぶデータサイエンス2「多次元データ解析法」』共立出版、2009年8月25日、3500円＋税

●畑農鋭矢著『財政赤字と財政運営の経済分析--持続可能性と国民負担の視点』有斐閣、2009年08月、3,255円（本体3,100円）

財政の諸問題について状態空間モデルを応用した実証研究。

### 15. 学会事務局から

#### 学会費払込のお願い

2009年度会費の請求書が会員のお手元に届いていることと思います。会費の納入率が下がると学会会計に大きく影響いたします。速やかな納入にご協力をお願い申し上げます。また便利な会費自

動払込制度もご用意しています。次の要領を参照の上、こちらもご活用下さい。

#### 学会費自動払込の問合せ先

学会費自動払込問合せの旨とともに、氏名と住

所を以下にお伝えください。手続きに必要な書類が送付されます。

〒101-0051 東京都千代田区神田神保町3-6  
能楽書林ビル5F

財団法人統計情報研究開発センター内

日本統計学会担当

Tel & Fax : 03-3234-7738

E-mail : shom@jss.gr.jp

## 訃報

次の方が逝去されました。謹んで追悼の意を表し、御冥福をお祈り申し上げます。

赤池 弘次 名誉会員
宇喜田 義昌 名誉会員
宮下 洋 会員

## 入会承認

池本賢悟, 尹清洙, 上田紘平, 奥井亮, 小澤明子,  
白澤英樹, 高井啓二, 中野あい, 間野修平  
(敬称略)

## 退会承認

岡崎陽一, 佐倉尚, 森克美 (敬称略)

## 現在の会員数 (2009年10月8日)

名誉会員	20名
正会員	1,385名
学生会員	45名
総計	1,450名
賛助会員	17法人
団体会員	5団体

## 16. 投稿のお願い

統計学の発展に資するもの、会員に有益であると考えられるものなどについて原稿をお送りください。以下のような情報も歓迎いたします。

### ● 来日統計学者の紹介

訪問者の略歴、滞在期間、滞在先、世話人などをお知らせください。

### ● 博士論文・修士論文の紹介

(1) 氏名 (2) 学位の名称 (3) 取得大学 (4) 論文題名 (5) 主査または指導教員 (6) 取得年月をお知らせください。

### ● 求人案内 (教員公募など)

### ● 研究集会案内

### ● 新刊紹介

著者名, 書名, 出版社, 税込価格, 出版年月をお知らせください。紹介文を付ける場合は100字

程度までとし、主観的な表現は避けてください。

できるだけe-mailによる投稿、もしくは、文書ファイル(テキスト形式)の送付をお願い致します。

### 原稿送付先:

〒560-8531 大阪府豊中市待兼山町1-3

大阪大学大学院基礎工学研究科

社会システム数理領域

内田 雅之 宛

Tel & Fax : 06-6850-6465

E-mail : koho@jss.gr.jp

(統計学会広報連絡用e-mailアドレス)

- ・統計学会ホームページURL：  
<http://www.jss.gr.jp/>
- ・統計関連学会ホームページURL：  
<http://www.jfssa.jp/>
- ・75周年記念事業ホームページURL：  
<http://www.math.chuo-u.ac.jp/~sugiyama/jss75>
- ・住所変更連絡用e-mailアドレス：  
[meibo@jss.gr.jp](mailto:meibo@jss.gr.jp)
- ・広報連絡用e-mailアドレス：  
[koho@jss.gr.jp](mailto:koho@jss.gr.jp)
- ・その他連絡用e-mailアドレス：  
[shom@jss.gr.jp](mailto:shom@jss.gr.jp)